

# 文芸かぶづ



第 25 号

# 目次

## 【『文芸かわづ』第二十五号発刊にあたって】

『文芸かわづ』第二十五号発刊によせて

……………河津町長 大川 良 樹…8

歴史と文化をたいせつに

……………河津町議会議長 渡 邊 弘…9

『文芸かわづ』第二十五号の発刊にあたって

……………河津町教育長 鈴木 弘 光…10

## 【第二十五号記念企画】

### 《昭和100年》河津町の思い出》

河津町の思い出……………望 月 美奈子…14

激しい世の流れ……………土 屋 典 子…16

川と海と私をつなぐ河津の水辺と生き物たち

……………渡 邊 満 昭…18

### 《昭和100年》河津町の絵本》

「わらしべ会」手作りの民話絵本

……………太 田 幸 子…22

## 《第九回『伊豆の踊子』読書感想文コンクール》

### 【一般部門】

#### 最優秀賞

旅の出会いの不思議……………後 藤 麻 美…30

#### 優秀賞

夏休みの忘れ物……………山 内 利 恵…33

### 【高校生部門】

#### 最優秀賞

人との出会いの大切さ……………足 川 紗 彩…38

#### 優秀賞

現代を生きる私……………吉 岡 涼…40

### 【一般部門】

#### 《随 筆》

着物は生きている……………望 月 美奈子…44

今井浜温泉に滞在した昭和の人々

……………久保田 真 琴…50

子どもの「問題行動」は、言葉にならない心の叫び

.....長崎 良夫...57

中村完陸軍中尉の陣中日記への思い

.....田村 年...59

《評 伝》

名誉町民の「石原忍」と文化の家

.....横山 宥久...70

《詩》

ふるさと.....土屋 千世子...84

《短 歌》

白さるすべり.....村松 清風...86

ローズマリー.....村松 秀代...86

合歓の木.....横山 春子...87

行く夏.....板垣 みや子...87

石ころ蹴りて.....太田 幸子...88

米寿.....清田 美保子...88

生きていく日々.....小林 康代...89

明るく楽しく元気良く.....櫻井 由子...89

線香花火.....杉山 みはる...90

夫の手温し.....杉山 ゆり子...90

夕暮れの天城嶺.....高川 千里...91

白内障手術.....高崎 たつ江...91

はげしき流れ.....土屋 のり子...92

モーニングコーヒー.....土屋 雅子...92

風花.....土屋 みさき...93

好きな色.....土屋 康子...93

声.....永野 えみ子...94

風の兆し.....長谷川 典子...94

盆の午後.....平川 佳美...95

代り映えなき日々.....細川 晋代...95

《俳 句》

白萩.....加藤 アキ子...98

涅槃会.....岩城 紀子...98

桐の花.....折田 倫子...98

針供養.....池田 静子...98

【中学生部門】

《作文》

栗をめぐる小さな争い	高木	100
てん	高野	102
ケガはいいこと	高木	104
最後の試合	小澤	106
僕のバレーボール人生	山本	108

《詩》

発表会	山田	112
中体連	鈴木	113

《短歌》

河津中学校	稲葉	116
一年	宮崎	116

高木	坂内	土屋	平川	福司	宮崎	稲葉
そら	こと子	駿人	和空	咲介	芽生	佑

河津中学校

二年

鈴木	山本	坂下	高木	大塩	笹川	島崎	外岡	簾田	鳥澤	酒井	鈴木	杉山	正木	飯田	土屋	鈴木	鈴木	島崎	
貫太	花	蒼仁	勇太郎	太一	明李	希々花	莉子	桜成	建樹	聖夜	誉士人	佳菜子	真	統	睦叶	歌巴	も	彩	環

河津中学校 三年……………118

土屋芽唯  
唐島田泰

《俳句》  
河津中学校 一年……………120

山本結良  
川尻怜奈  
平川紗也  
高溝満叶子  
土屋真緒  
鳥澤唯生  
福司健介  
大塩結愛  
山本紗良  
高溝満叶子  
堀江陽太

大塩七愛  
宮崎芽生  
稲葉陽大  
土屋七菜

河津中学校 二年……………121

正木翔太  
土屋駿人  
坂内こと子  
土屋歌巴  
田畑脩蔵  
正木統真  
原木大獅  
鈴木彩映  
鈴木來海  
後藤菜那  
望月清登

増田心春  
鳥澤建樹  
杉山佳菜子  
相馬健心  
相馬健心  
簾田桜成  
酒井聖夜  
笹川明李  
土屋聡躍

河津中学校 三年……………122

高木 勇太郎  
小林 權  
土屋 カンナ  
土屋 芽唯  
高野 詩七  
北川 太陽  
森川 小陽  
土屋 真緒  
平川 紗也  
金指 和希  
長谷川 湧士  
平川 柊叶  
江口 丈太郎  
山本 芯  
大塩 千晶  
五十嵐 沙羅  
朝岡 奈央  
稲葉 裕壽郎

編集後記・編集委員紹介……………123

表紙 題字……………鈴木 谿石

版画……………折田 直人

挿し絵 河津小学校児童作品より 二十点



【『文芸かわづ』第二十五号発刊にあたって】

# 『文芸かわづ』第二十五号発刊によせて

河津町長 大川 良 樹

平成十四年の創刊以来、ここに『文芸かわづ』第二十五号を発刊できますことを、心よりお慶び申し上げます。これもひとえに日頃より文芸活動に励んでおられる方々の意欲や熱意と、また、発刊に向けて編集作業等にご尽力いただいている編集委員の皆様のおかげであると感謝申し上げます。本誌は、単なる作品発表の場に留まらず、私たちの故郷・河津の豊かな自然や人々の営みを、繊細な感性で捉え、言葉として後世に繋ぐ、かけがえない役割を担っています。

河津町は、毎年美しい花を咲かせる河津桜をはじめ、天城の山々と清らかな河津川、そして変化に富んだ相模灘に囲まれ、四季折々に表情を変え、「詩情豊かな町」です。町民一人一人の心の中に宿る感動や想いを、この場所で育まれた言葉

で表現し、発信し続けていただきたいと願っています。

町といたしましても、皆様の文芸活動がより一層花開くよう、環境整備に尽力してまいります。今後とも『文芸かわづ』が、町民の皆様にとって心の拠り所となり、また、町外の方々には河津の魅力をお伝えすることとなることを期待しております。

今後とも、末永く発刊され、文芸活動が続きますよう祈念し、結びの言葉とさせていただきます。

## 歴史と文化をたいせつに

河津町議会議長 渡 邊 弘

この度は『文芸かわづ』第二十五号発刊心より  
お祝い申し上げます。

発刊にあたっては編集委員の皆様のご尽力とご  
応募される皆様のおかげであると感謝申し上げます。  
今号の記念企画は「昭和100年 河津町の思い出」  
とのこと。不思議なことに川端康成の『伊豆  
の踊子』が発表されて100年です。これも何か大き  
なご縁かとドキドキしました。歴史としては峰温  
泉大噴湯も温泉が吹いて100年です。歴史の100年は  
短いですが、いろいろな出来事が詰まっているよ  
うに思います。

今の河津町があるのは今まで河津に住んだ人た  
ちの思い、楽しかったこと、苦しかったこと、い  
ろいろな人たちが築き上げてきた賜物だと思いま  
す。歴史と文化を大切にすることが町の発展にも

つながると思います。町民の皆様のご応募がワク  
ワクする『文芸かわづ』になると思います。

結びに、これからの河津の文芸文化がますます  
発展することを祈念申し上げます。

## 『文芸かわづ』第二十五号の発刊にあたって

河津町教育長 鈴木弘光

ここに『文芸かわづ』第二十五号を刊行することとなり、創刊から二十五年の間、投稿者と編集委員の皆様はもちろん、町民の皆様からもご協力・ご支援を賜り感謝申し上げます。

さて、教育長室の書棚の一番上には創刊号からの『文芸かわづ』が並んでいます。仕事の合間に適当な号を手に取り、適当なページを開いては、町民の皆さんのいろいろな文章との偶然の出会いを楽しんでいます。

時には、田村年氏の「寺町物語」(第二十二号、第二十三号)や鈴木千代雄氏の「石原忍先生と文化の家図書館」(第七号、第八号、第九号)、また鈴木基氏の「与謝野晶子と河津」(第八号、第九号、第十号)などのページを開き、関連する号を探しながら、地域やいろいろな方々の河津との関わり

の理解を深めたり、平川菊哉氏の漢詩「河津桜の郷」(第六号)を読みながら、美しい河津桜の頭に思い描いたりしています。

『文芸かわづ』は河津町の皆さんの思いを知ることはもちろんですが、町の季節ごとの美しさを感じ、歴史を再考し、人を思い、生き方を学ぶとても貴重な教科書(文献)です。

町立図書館「文化の家」には創刊号からそろえてありますので、是非いろいろな文章との出会いを皆さんにも楽しんでもいただきたいと思います。ところで創刊号に当時の飯田教育長の次のような言葉があります。

「文を書くという仕事はエネルギーを必要とします。そのエネルギーが、美しき文化の町を築く力に転化され、よりよい町づくりにつながれば望

外の喜びです。」

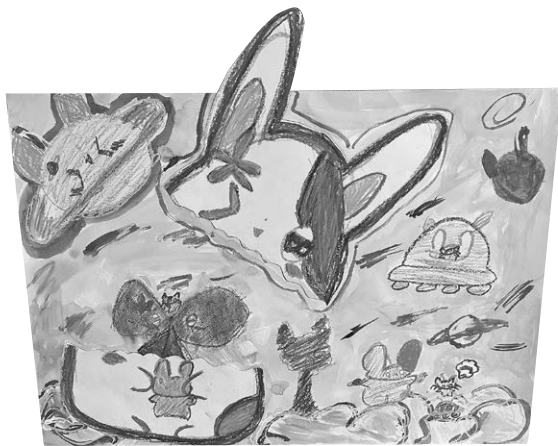
この思いを受けながら、二十五歳を迎えた『文芸かわづ』が、これからも多くの方々に見守られながら豊かに育っていくことを願っています。

最後になりますが、第十八号からこの第二十五号まで表紙を飾る版画をご提供いただきました折田直人先生のご冥福をお祈りします。ありがとうございます。



「さわってみると・・・」

稲葉 鈴



「うちゅうの友だち」  
和泉 舞

【第二十五号記念企画】

【昭和100年】

河津町の  
思い出

## 河津町の思い出

望月 美奈子

私が河津町で生まれ育ったのは、昭和十二年から三十一年までの稲取高校を卒業するまでです。

天城山や七滝を背にした静かな奥深い村でした。道路は砂利道で石ころがごろごろしています。その道を朝早く馬が通るので馬糞が落ちていたり、砂利石が飛び散ったりしていました。

そこで、私たち湯ケ野部落では学校に一番近かったので学校までの道をきれいにしようかと相談して毎朝道路掃除をすることにしました。

ことの始まりは湯ケ野の「とちぎやのおじさん」が毎朝馬糞を拾って道路をきれいにしていることを知ったのです。

おじさん一人では大変だと気づき湯ケ野部落で相談して一緒に清掃することにしました。

昔、昔のことなので塾もなく勉強に重きを置か

なかった時代だったので、朝の早起きなど苦にできなかったのでしょう。みんなが喜んで道路掃除に参加したのを覚えています。

このことが「表彰状」を頂くことになり、みんな二度の喜びを味わいました。

### 表彰状

湯ケ野部落学校

六月一日からずつとつづいて早起して湯ケ野の町全体の道のお掃除を実行している之は湯ケ野全体の皆さんが仲よく力を合せて善い事につきすすんでいる立派なことですから表彰します

昭和二十四年七月二十三日

上河津小学校職員會

私の手元にある一枚の表彰状が意味する重みを米寿を迎えた今心にずっしりと重く・温かく沁みわたっています。

戦争で多くの若者を失った戦後の日本は子どもたちを立派な大人へと育てなくては…と心を砕い

ていたのでしょうか。

上河津小学校の先生たちは子どももの動きをしつかり見つけて褒めて、励まし「心の教育」に重きを置いた姿だったと思います。

戦後の混乱期の中で教育に熱心に・真摯に取り組まれた先生たちの姿に頭の下がる思いです。

戦後八十年を迎えた今、さまざまな局面で価値観が変わっていますが、どのような時代がきても

「人づくりの基本」は変わらないと思っています。

「言ってみて、聞かせてみて、仕手みせてやらねば人は育たじ」の言葉を胸に秘めて、若い人たちに接したいと思うこの頃です。



「おともだちといっしょにおさんぽしているところ」

吉田 結南

## 激しい世の流れ

土屋典子

私がこの地に嫁いで来た当時は、道も舗装されておらず不便な山里でした。

勤めていた幼稚園も退職していたので、勤めに出る事も許してもらえず、なれない暮しに実家に帰りたい気持ちでいっぱいでした。

嫁いで二年後に勧められて自動車学校に通い、運転免許証を取り、行動範囲も広がり、家事、育児、農業にと忙しく働く日々が始まり、泣いたり、笑ったりでしたが、自然の中で物を育てる農業と子育てとの共通点もあり、楽しさも増し、辛さは少なくなっていました。

伊豆急も開通していた事もあり、大島近海地震の復興もあり、農村会館も出来て便利さも増し、見高入谷の若い女性の生活改善グループ「すぎなの子」も結成され、町や県との繋がりも生まれ、

素晴らしい活動に皆生き生きとして活動していました。

町の農業経営振興会の「ふるさと部会」にも加入し、「河津桜まつり」の初期には観光客をもてなす甘酒を配ったり、搗きたての餅をサーブしたりと若い町の職員と一緒に活動して、出店も三店舗からの始まりでした。ひもの屋さん菓子屋さんとふる里部会のみでした。

町の協力もあり、南中跡地で、地場産の野菜や柑橘類を販売する「市」も開くことも出来て、部員も頑張ったものです。

河津をもっと知ってほしい気持ちで県の生活改善グループの理事三十余名を招き「河津桜を観る会」を開くことを提案し、町の協力も得て会費制で七滝温泉に一泊し、当時の町長さんにお願ひし、「河津自慢」と題してお話をしていただき、皆大喜びをしたり、感心したりしていました。私の鼻も高かったものでした。

県教委からの依頼もあり、国内研修で先進地大阪を訪問して研修させていただきました。埼玉県に

ある女性会館で開催された全国女性会議にも参加して多くを学びました。

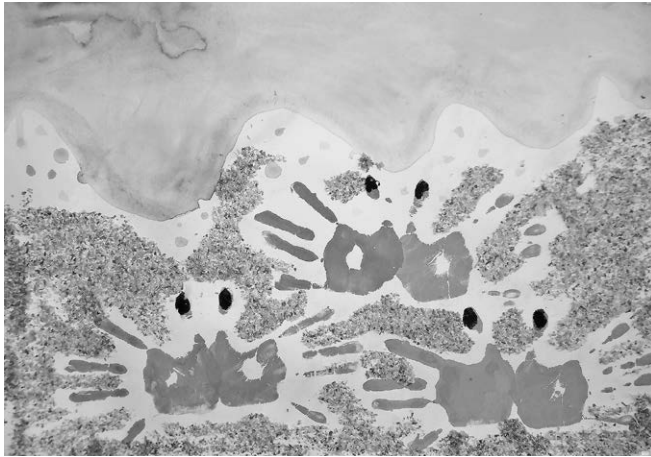
その折、食事を共にした沖縄の婦人の言葉が心に深く残りました。

「親を大切に思う子に育てる」事を特に力説していました。

意見が言えて、それを聞き入れてもらえる立場にある事の大切さを知りました。

はげしく動く時代を生きて、様々な人との交流と経験と学びは私の大きな宝となりました。家族の協力もあり幸せな人生です。

「温故知新」この言葉のように、一人一人が自覚を持って、河津町を住み良い町にしていけたらいいと思うこの頃です。



「なかよしのかに」

長田 明治

## 川と海と私をつなぐ河津の水辺と生き物たち

渡邊満昭

十八歳で家を出て数十年、河津での時間は生涯のほんのわずか。でもふと水辺を目にすると、ひんやりして気持ちの良い河津の川の感触を感じる。小さな頃の自分はいつも片手に網を持ち水辺にいた。背丈の伸びた今の自分が感じるより、ぐっと近くで光る水面。そこに潜む生き物たちも、老眼に写る姿よりくつきり見えていたことだろう。

さて、『文芸かわづ』は様々な年代の方が手に取ると聞く。新しい世代の生き物好きにも河津に集うかつての川仲間達にも、読んでもらえればうれしい限りである。

### 一、育ての恩を感じる鍛冶屋沢川

峰の一角を流れる小さな川。漢字は大人になっ  
てはじめて知った。幼い自分にとってはまさに育

ての親。小川なのに海から遡上した大きなウナギもモクズガニも、時に鮎もいた。いつもスミウキゴリ(ボチ)を釣り一人で遊んでいた。蛍も飛ぶし、夜はテナガエビやスジエビ・ヌマエビの目が光る。それをエビ玉(網)でごっそりすくうのだ。源流探しの探検では、石の上をびよんぴよん跳ぶのが最高だ。だから選んだスポーツも、陸上競技・三段跳なのだ。一度だけだが、低山にはいないアマゴも捕まえた。上流の淵(大人の感覚では水たまり)では、八方によるよる逃げていくものを見つけた。ウナギと違いえら穴がいくつかあったので、河津川未報告のスナヤツメではと今も思っている。

### 二、いよいよ大川(河津川)に進出

小学校に上がると、魚つりの腕前が上がったのとやっぱり泳ぎたいのとで、大川に入り浸りになる。毎日の学校の行き帰りも、川を流れたり遡ったりする感覚だった。

春はマス釣り大会で盛り上がる。大きな残りマ

スをルアーで釣ったが、大会の時に釣れて欲しかったな。河口や堰には四十センチを超えるウグイが遡上する。かかった瞬間は全く動かず重い。マルタ(ウグイの仲間)かもと調べてみたけど婚姻色が違う。時にスズキ(ヒラスズキ)もかかる。自分ばばらしてばかりだが、友達の釣った大物の口に手をかけ引き上げた。でもやっぱり悔しいものだ。

夏から秋は、木製の来の宮橋や豊泉橋の上から黒光りの石を旋回する鮎を眺め、縄張りを読む。夕まずめ鮎のドブ釣りは入れ食い。餌釣りの蛍光ウキもすつと斜めに水に沈む。暗くなるとぶつ込み釣りのウナギ竿の鈴が鳴り始める。潜ってはウツセミカジカや大きなアユカケ(アイトリボチ)をモリで突く。水面にはミズスマシが円を描く。ボウズハゼ(ゲンニユウ)もヒラテナガエビも、第二胸脚が太い憧れのミナミテナガエビもたくさんいた。海にしかないはずのヨウジウオを川で見つけたが、近年、カワヨウジという種類が河津川から報告されていた。タカハヤ(アブラハヤかな)のアルビノ個体?(オレンジ色なのだ)も数

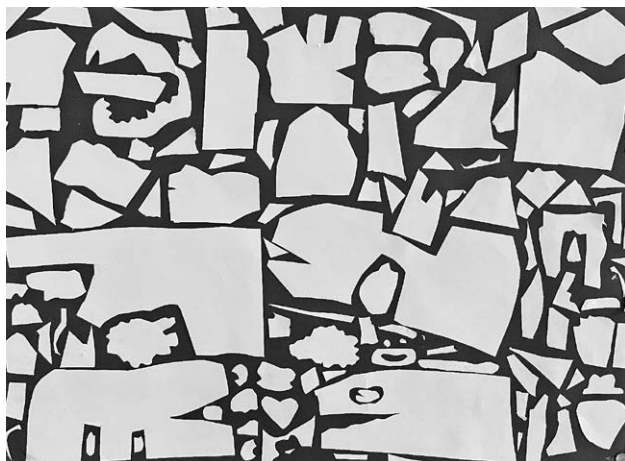
匹捕獲した。多分未報告の現象だろう。

浅瀬でバシャバシャと産卵する鮎が、黒くさびて流れを下り落ちていくと冬。こんどは冷たく澄み切った川を眺め、幻のように川底にはりつく褐色のウグイの群れを探すのだ。

### 三、まとめ

自分にとっては、発見ばかりのとても豊かな水辺だった。小学生ながらに「いつまでこの堤防を歩き続けるのだろう。」と思つて毎日過ごしていたのだが、わくわく続きのおかげで通い通すことができたのかも知れない。

今日の河津の水辺はどうだろう。たとえば温泉が流れる谷津川では、越年鮎や南方由来の生物群(両側回遊性コエビ類やオオウナギなど)の報告が続いている。広報河津六百二十八号のオオサンショウウオ調査も興味深く読んだ。海と川の生き物が自由に行き来できる河津川のポテンシャルは、今なお計り知れないと私は思つて(願つて)いるのだが。



「みんなでパーティー」

古山 千夏

【昭和  
100年】

河津町の

絵本

## 「わらしべ会」手作りの民話絵本

「わらしべ会」会長 太田 幸子

昭和56年、読書会のメンバーで、河津に残る昔ばなしを伝承した絵本を創作したいという思いで、「わらしべ会」が発足しました。しかし、全員がまったくの素人です。何度かの講習会や協力してくださる方等の指導を受けて、絵本づくりが始まりました。

まずは、題材となる話を決めるために、町内の各地を訪ね歩き、100歳になるおばあさんにもお話を伺いに行きました。埋もれた話を掘り起こしていききたいという思いと、私たちが今聞いておかないと、という使命感がありました。

一年に一冊のペースで作られた絵本は、全部で20冊。町中を聞き歩いて集めた昔ばなしです。それぞれの人が、それぞれの時期に、それぞれの場所ので聞き繋いできた昔ばなし。ひとつのお話も、

100人いれば、100通りの言葉で伝えられているのも、昔ばなしならではの思いです。

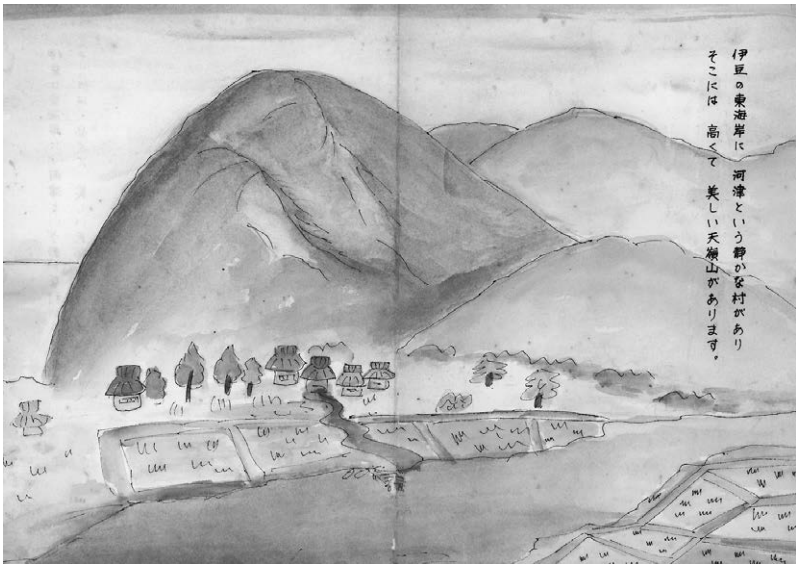
令和8年(2026年)に、昭和元年(1926年)から起算して満100年を迎えます。これを契機として、昭和に制作した河津町の絵本を次世代に伝承していきたく、「わらしべ会」の絵本1冊を『文芸かわづ』第25号に掲載させていただきます。

「わらしべ会」の絵本は河津町立文化の家図書館で貸し出しも行っていますので、お気軽に手に取っていただければ幸いです。

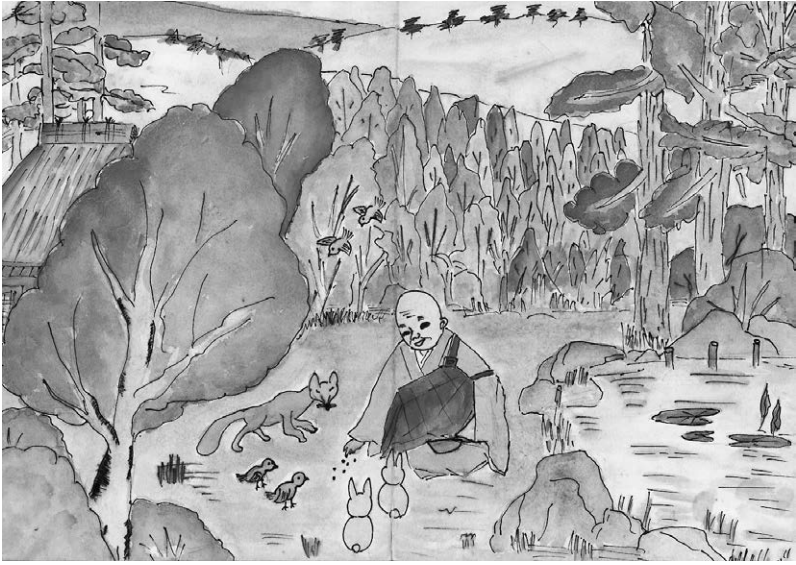


「たぬきとすいてんさん」

「わらしべ会」作

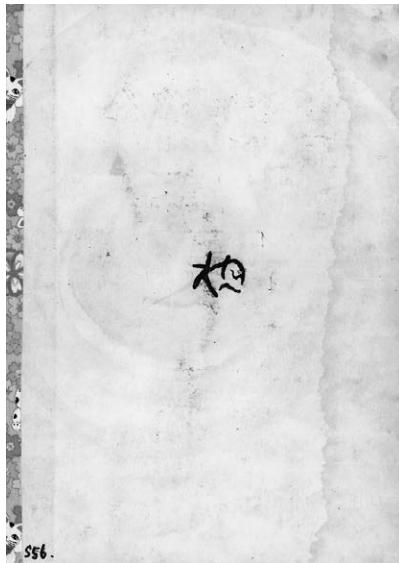












《第九回 『伊豆の踊子』 読書感想文コンクール》

【一般部門】

最優秀賞  
優秀賞

最優秀賞

## 旅の出会いの不思議

後藤 麻美

十九歳の時、私は初めて一人旅というものに出た。理由は二十歳を迎えるにあたり、自分一人の力で何かをやり遂げてみたいと考えたからだ。目的地は屋久島、縄文杉を見に行くことが最大の目当てであった。

『伊豆の踊子』の主人公も二十歳で伊豆への一人旅に出ている。その理由は、「自分の性質が孤児根性で歪んでいると厳しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に耐え切れない」からと述べられている。何やら難しいが、とりあえず自分の性格について苦悩を抱えていたことが推察される。私の一人旅の理由とは当然のことながら少し違う。では、旅を終えて主人公の心はどう変化したのだろうか。東京へ帰る船の中の場面にこう書いてある。

「ただ清々しい満足の中に静かに眠っているようだった。」と。つまり、主人公は旅を経て心が十分に満たされたということになる。

それならば、主人公の心を変えたものは一体何だったのだろうか。それはもちろん、踊子との出会いに他ならない。しかし、勘違いをしてはいけない。『伊豆の踊子』は恋の話ではないのだ。もちろん初め主人公は踊子に興味を持ち、この旅芸人一行に近付くのだが、踊子が十四歳でまだ幼い娘であることに気づき、「思い違いをしていた」と一人笑うのであった。まことに勝手な思い違いだが、このように踊子が恋愛対象から外れたおかげで、主人公は安心して旅芸人一行と交流できるようになったと思われる。そして、彼らと過ごしていくなかで、「ほんとにいい人ね。いい人はいね。」と言われるのである。おそらくこのことが主人公の心の憂鬱をほどいていったのだろう。自分の性格に悩んでいた主人公が、他人から「いい人」と認められたことで自己肯定感を高めることができたのである。

こうして考えると『伊豆の踊子』は、伊豆の旅で出会った旅人達との交流により、主人公の心が温かくなったという話なのである。

私の一人旅もまさにこのようなものであった。青春18切符を使い四日間かけて屋久島にたどり着いた私は、縄文杉を見に行くための仲間を探していた。さすがに一人で宮之浦岳への往復十二時間の道のりを歩くのは不安だったのである。幸運なことに、ここで旅人の連帯感が発揮される。私の泊まっていたユースホテルには、若者の旅行者が溢れていた。その場で初めて出会った者同士が気軽に声を掛け合い、みんなで海辺の温泉に行くというようなことも行われた。その中に、同じく一人で卒業旅行に来ていた女の子がいた。私はその子に声を掛けた。そしてあれよあれよという間に縄文杉を目指す四名が集まった。こうして、縄文杉を見に行くという目的は無事に達成されたのである。

この経験を通して心に残ったことは、年齢も性別も出身地も人生経験もまるで違う四人が未計画

に出会い、同じ目的と時間を共有したことの不思議さである。私たちはそれまで全く無関係だったけれど、たまたま同じ目的地を目指したために「道連れ」となった。そこには確かに日常とは少し違った高揚と穏やかな友好があった。内向的で人見知りの自分が、殻を破って見ず知らずの他者と関わり合いになったのだ。この経験は、私にもこんなことができた、知らない人に仲間として受け入れてもらえた、という新鮮な喜びにつながった。『伊豆の踊子』の主人公にも似たような喜びがあったのではないだろうか。

おそらく旅人同士の出会いは、互いの立場を対等にする効果があるのだと思う。『伊豆の踊子』の作中でも、世間的に肩身の狭そうな扱いを受けていたであろう旅芸人に対し、主人公は全く気にせず、彼らと交流している。「私の尋常な好意は、彼等の胸にも沁み込んで行くらしかった。」という箇所を読んだ時、私の心もそっと温かくなるような気がした。

旅芸人一座との別れに際し、主人公は涙を流す。

しかしその涙は恋しく苦しい涙ではない。「その後には何も残らないような甘い快さ」と表現されている。旅を通じて浄化された心の表れである。

物語は、主人公が東京へ向かう船に乗った場面で終わっている。だが、踊子たちの故郷である大島に遊びに行くという、あの約束は実現したのだろうか。私は大島には行っていないのではと思う。なぜなら、彼らとの交流は、貴重な旅の思い出にしておいた方が美しいまま保たれるからだ。

この作品は、静かで不思議な雰囲気に含まれている。印象に残るような大きな出来事もエピソードもない。心情描写も少なく、小説というよりは日記に近いものを感じる。旅の情景とささやかな会話が、主人公の目を通して時に微細に、感覚的に語られていく。だからこそ、まるで読者も一緒に旅をしているような感覚に陥るのだ。時代も年齢も全く違うけれど、鬱屈した気分を抱えた時、主人公の通った道を歩き、一緒に心の浄化を試みるのもいいかもしれない。



「プリンからうまれるてんごく」

渡邊 美咲

優秀賞

## 夏休みの忘れ物

山内 利恵

私は学生時代に教科書も読まない学生でしたので、『伊豆の踊子』を読んだことがありませんでした。高校時代の国語の授業で、「伊豆出身のあなたはこちらの作品を読んだ事ありますか？」の質問に、「特急踊り子号にも乗るし、網代銘菓の伊豆乃踊子は食べたことがあるのですが、まだ読んでいません。」と返答をし、クラス中がドツと笑いに包まれた懐かしい思い出と共に、読まなくてはという義務のような感情を持ちながらも、私は読めませんでした。当時もその感情を学友に相談すると「山口百恵や吉永小百合、美空ひばりなどのビッグネームで映画化されているからどれか見てみれば。」とアドバイスを受けましたが、それもできませんでした。

あれから30年、私はやっとやり忘れた宿題に取り掛かりました。幸い我が家のリビングの本棚には日本文学全集なるものがあり、その中の川端康成全集から『伊豆の踊子』を探して読み始めました。なんと、十数分で読み終わりました。「あれ、もう終わり？」雑味のない、自然な雰囲気でも自分のその時代にタイムスリップして、一緒に旅をしているような気分になりました。海外の方が昔の日本らしさやイメージを感じられるような内容ですが、私にはわかりません。私は自分が読み込めなかつた何かを探そうともう一度読みました。

二度読むと私はなんとなくこどもの時に公園や出かけ先で知らないこどもと勝手にしゃべって遊んで楽しかった記憶を思い出し、今も病院に行くこと知らない方に話しかけられ、世間話をする事に思いを馳せ、「旅は道連れ、世は情け」の文化ってノール団体が感銘したのかな？と予想しましたが、納得できない違和感を感じ、今度は深く意識を飛ばすように、目をつぶって『伊豆の踊子』の世界を想像してみました。

突然、私は父方の四代前の江戸時代の私の高祖母が旅回りの芸人について失踪したという話を伯父から聞いた事を思い出しました。母が失踪した三歳の祖父は父に背負われ、父娘で池に入水し、無理心中をはかった所を近所の方に助けていただき、縁続きの家で大切に育ててもらえたあと、結婚と同時にまた家に戻ってきたようです。中学生でその話を聞いた時、きつと高祖母は芸人たちが楽しそうだし演出などに感動して、自分もお芝居か踊りでもしたくなつてアイドルでも追いかけるように別世界について行ってしまったんだろうなと思っていました。そういえば、私は昭和最後のスーパースター光ゲンジにも全く目もくれず、友だちとの会話にいつも困っていたことも思い出し、もしかするとこの高祖母の話を嫌がってしない父の意思を無意識に感じ、自分もそういうものを避けてしまうのかもしれないと気づきました。そして、私は急に『伊豆の踊子』を身近に感じ、自分の中にあるわからない何かを探すようにさらにはもう一度読んでみました。三度目は自分も体

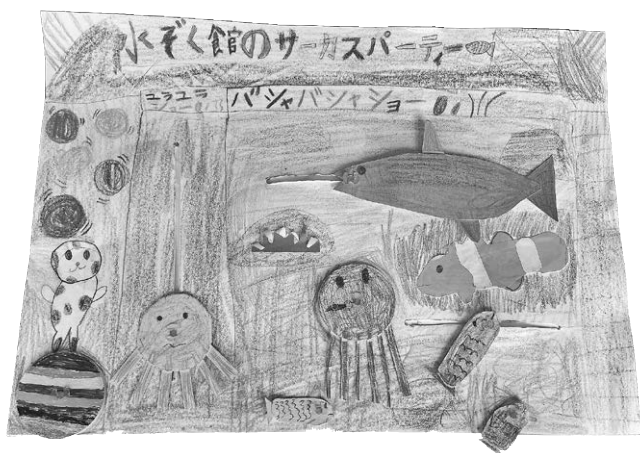
験したような、思った事があるような感情をはつきりと認識し、ノーベル文学賞の作品で映画化されているから、非日常のすごい内容の話では？と勝手に決めつけていたから気付けないうち大切な事に気付きました。

「なんだか、生きている気分が楽になる」

私の気持ちはとても軽く晴れ晴れしています。そして、高祖母は多分知らない所からお嫁に来て、土地や家にすら慣れず、産後うつもあり、自分が助かるために旅回りの芸人についていき、歌って踊って楽しかったかもしれないが、ただ、それは傍目には明るく楽しく華やかであっても、自分の心のモヤモヤ感は拭えず完全に昇華できず失踪後も苦しんだのではと不憫に思いました。また、結婚でやっと生まれ故郷に戻ってきた曾祖母も旦那が25歳で急に亡くなり、小学校用務員として働き始め、それを涙ながらにみている者がいるので理由を尋ねると曾祖母の祖母と名乗ったそうです。私の天祖母もまた家を出ていて、その後2回も結婚していました。孫の旦那が若くして亡くなった

と聞いて様子を見に来たそうです。

代々迷い続ける人生が続く我が家には本当に必要な文学で、遅ればせながら人生折り返し地点で私なりに深く読み、感想文の宿題ができたことに安堵し、さらに、高校時代などに読むより自分の人生を誤らないために良かったのではないか。そして、もし時空を超える事ができるのならば、代々苦しんできたご先祖様に読んであげたいと思い、これは世界の皆様にも読んでもらうに値する作品だと思いました。『伊豆の踊子』は主人公の「私」の心の動きが人生のブレに重なり、人生の心のサポーターになる世界の皆様に救うような作品だと思います。



「ユラユラバシャバシャショー!!」  
小塩 実璃

【高校生部門】

最優秀賞  
優秀賞

最優秀賞

## 人との出会いの大切さ

静岡県立伊豆総合高等学校二年 足川 紗彩

『伊豆の踊子』を読み、私は人と人のつながりに  
ついて、深く考えさせられました。この物語の主  
人公は、孤児であり踊子に出会うまで孤独を抱え  
て生きており、自分が孤児根性で歪んでいるとい  
う厳しい反省をして、その憂鬱に耐えられないの  
で伊豆の旅に來ていました。しかし、旅の途中で  
出会った踊子の明るさや無邪気さにより、主人公  
の心が少しずつ癒やされていきます。

主人公が「いい人ね」と踊子たちに言われて、そ  
れまでは自分のことを否定的に見ていたけれど、  
初めて自分はいいい人だと素直に感じることでき  
たという描写が特に印象的でした。人との出会い  
によって、主人公の考えが大きく変わる場面でした。  
私自身も自分の将来に迷っていた中学生の時に、父

から「優しい性格だから、人の面倒を見る仕事に向  
いているんじゃない？」と言われ、人に役立つ仕事に  
自分は向いているのかも自信を持つことがあり  
ました。また母や友達と何気ない会話をすること  
で、落ち込むことがあったときも気持ちを切り替える  
ことができたこともありました。自分だけでは良  
い方向で考えられない時も、周りの人の何気ない  
言葉で、考えが良い方向に変わる時があります。  
主人公が素直な気持ちになる印象的な場面でした。

また、船で東京に帰る時、主人公がお婆さんの  
面倒を頼まれて、お婆さんの世話を快く引き受け  
ましたが、踊子に出会う前ならば、もしかしたら  
他人の世話をすることを断ったり、迷惑に思っ  
たりしていたかもしれない主人公が、「お婆さ  
んを駅まで連れて行って切符を買ってあげるのも  
至極あたりまえのことだ」と自然に感じられたと  
ころが大きな変化だと思いました。主人公の心が  
踊子との出会いによって、他人にも優しくできる  
心の余裕ができたことが感じられました。

最初は、突っ立っている私に自分の座布団を渡し

てくれた踊子に「ありがとう」の感謝の言葉も言えなかつたり、茶店のお婆さんに、「よろよろした足取りが迷惑だった」と感じていたりした主人公が、踊子達との出会いにより最後には他人の面倒まで見たり他人に自分の素直な感情を伝えた場面を通して、優しくされたことで、心に変化が生じて、他人にも優しくできるということを『伊豆の踊子』から学びました。私も周りの人が困っていたら、声をかけるなど、自分にできることをしようと、『伊豆の踊子』を読んだことよってあらためて強く感じました。

また、物語の表現で特に印象的だったのは、「頭が澄んだ水になってしまっていて、それがぼろぼろ零れ、その後には何も残らないような甘い快さだった。」という表現です。涙を流すのが、悲しいという感情だけでなく、素直に自分の気持ちを表現できることが心地よいと感じた主人公の気持ちが表現されていて、とても自分には考えられない独自の素晴らしい表現だと思いました。

全体的に、昔の物語なので今まで読んだことのない表現や意味がわからない言葉もあり、全てを

理解することは難しかったですが、「修善寺」や「長岡温泉」など学校の周辺の地名が出てきて、親近感を少し感じながら読むことができました。

また、最初は主人公の気持ちや行動がよく理解できませんでしたが、主人公が踊子たちと接して、仲良くなつたり、頼りにされたりすることで、だんだん変わってきて、別れる時に涙を流し、自分の気持ちに素直になっていくところが興味深かったです。

『伊豆の踊子』を読んで、周りからの親切心を受け入れることや、素直な気持ちを周りに伝えることができることは、当たり前でできることではないのだと感じました。主人公にとつての「踊子」のように、私自身も今まで家族や周囲の人に優しい言葉をかけられたり、親切にされたりしたことで、良い影響を受けて今の自分があることをあらためて感じました。また、私自身が家族や周囲の人に優しくすることで、その人達に良い影響を与えたり、支えになったりすることができるよう、これからも日々を大切に過ごしていきたいと思えます。

優秀賞

## 現代を生きる私

静岡県立伊豆総合高等学校二年 吉岡 涼

川端康成の『伊豆の踊子』を読んで、とても心に残る作品だと感じました。私がこの本を手にとったのは、授業で先生から配られたことがきっかけでした。川端康成が日本人で初めてノーベル文学賞を受賞したことを知り、どんな話なのか興味を持ちました。

物語は一人旅をしている主人公が伊豆で出会った踊子の少女との交流を描いています。大きな事件が起こるわけではありませんが、その淡い関係と旅の中での出来事がとても印象的でした。読み進めるうちに、主人公と踊子の距離感が丁寧に描かれていることに気づきました。二人は言葉にしない感情をもちながらも、お互いを思いやる気持ちが伝わってきて、切なさを感じました。思春期

の自分には共感できる部分も多く、特に感情をうまく言葉にできないもどかしさがリアルに伝わりました。現代の私たちは、スマホやSNSで気持ちをすぐに伝えられますが、当時の人たちはそうではなく、その距離感や沈黙の中に意味があり、それが凄く良いと感じました。

また、作品全体に流れる伊豆の自然描写も魅力的でした。山や川、温泉街の風景が細かく描かれていて、まるで自分がその場にいるかのような気持ちになりました。自然の中で過ごす時間が、二人の心を少しずつ近づけていく様子が伝わってきて、旅の良さを改めて感じました。

物語の最後、踊子と主人公が別れるシーンはとても静かで、それでいて心に強く残りました。言葉で気持ちを伝え合うことはありませんでしたが、その静かな別れに深い意味があり、寂しさと同時に大切な思い出として残っていくのだと思います。今の時代なら連絡先を交換していつでも会えるかもしれませんが、当時はそう簡単ではなく、だからこそ一瞬一瞬の出会いが尊かったのだと感じ

じました。

この作品を読んで、自分も人との関係や時間をもっと大切にしようと思いました。普段の生活では忙しさに追われがちですが、たまにはゆっくりと周りを見て、出会いや別れを大切に感じることが必要だと思います。

川端康成の繊細な文章からは、言葉にできない感情や心の動きが伝わってきて、読書を通じて自分自身の気持ちにも向き合うことができました。これからも様々な文学作品を読んで、自分の感受性を豊かにしていきたいです。そして、『伊豆の踊子』のように、心に響く作品に出会ったときには、じっくりと時間をかけて味わいたいと思います。読書は単に知識を増やすだけでなく、自分の心を育てる大切な時間だと改めて感じました。今回の授業でこの作品に出会えたことに感謝していますし、これからの生活にも活かしていきたいです。

加えて、物語を読み進める中で感じたのは、主人公の「私」が旅を通して少しずつ成長していく

様子です。初めは旅先での出来事に戸惑いもありましたが、踊子の少女と触れ合うことで、自分の中にある純粋な感情や優しさを再確認しているように思えました。現代ではなかなか味わえない、素朴で静かな感動がこの作品にはあります。

また、踊子の薫という少女の存在はとても魅力的でした。彼女は年下ですが、はっきりとした意思や芯の強さを感じさせる人物であり、主人公に對しても自然体で接しているのが印象的でした。薫の無邪気さと大人びた部分が混ざり合ったような雰囲気、主人公も引き込まれているように感じました。そうした二人の関係性が淡く繊細に描かれている、読んでいるこちらも胸が締め付けられるような気持ちになりました。

さらに、当時の日本の風景や人々の生活が丁寧に描かれていることも、この作品の魅力の一つだと感じました。都会とは違う自然豊かな環境の中での旅は、主人公にとっても特別な経験だったのだと思います。現代の便利な暮らしに慣れた自分にとって、こうしたゆったりとした時間の流れや、

直接人と顔を合わせて話す温かさは新鮮で、少し羨ましくも感じました。物語の中で描かれる踊りや歌、旅芸人の生活も、現代では見ることでできない貴重な文化であり、その一端に触れられたことは貴重な体験でした。こうした日本の伝統的な文化や自然の美しさを知ることができるのは、川端康成の文章の力だと思えます。

最後に、この作品を読んで学んだことは、人生にはいろいろな出会いがあり、その一つひとつが自分を形作っていくということです。短い旅の中での出会いが、こんなにも心に残ることがあるのだと知り、自分ももっと人との関わりを大切にしていきたいと思いました。今後も様々な経験を通じて、自分の心を豊かにしていけるよう努力したいです。

今回の読書感想文を書きながら、川端康成の繊細な表現や人物描写の深さを改めて感じる事ができましたし、これからもこうした文学に触れていきたいと強く思いました。



「ぐるぐるなジェットコースター」

堤 喜翔

【一般部門】

隨筆

## 着物は生きている

望月 美奈子

### 一 公民館まつり

本年の着付サークルの題は「想い出の着物」として発表します。

まず私の着ている着物からお話ししますが、題名をつけるとすれば「宮中に行き損なつた着物」でも言えるでしょうか・・・と言いますのは昭和五十年の昔、昔に遡る話ですが、私の母親が短歌の勉強をしていた頃、宮中の「歌会始」の御題が「友」という題でした。母の作つた歌が大変上手に出来たので応募しようということになり応募しました。と同時に合格するものと思ひ込み、宮中に着て行く着物を選び始めました。三越・高島屋などあちこち探し回り見つけたのですが、結果は落選でした。

それから母らしい振舞いでした。

私の娘や私の姉の息子（孫たち）の結婚式にこの着物を着ました。私が「親族だから『黒留袖』でなくては・・・」と言つても母は決まつて「冗談じゃない。宮中にも着て行こうか・・・という程の良い着物があるのに、結婚式のような目出度い時に着なくていつ着るの。私は親族の席ではなくて来賓の席にして。」とお客様の席でご満悦だった母の姿を思い出しています。

引き続きましてサークルの皆さんの着物を紹介します。

与芝さん（紬）この着物は「黒八丈」という織物です。八丈島の方から昔大変お世話になつたお礼にと贈られたものです。

長い年月を経て縁あつて私が頂き、着物に仕立てました。知らない方々の思いを大切に仕立てたと思ひます。

田中さん（小紋）薄紫の紋紗です。

夏に料亭に行くことになり、薄紫の紋紗を買いました。帯も一緒に色を合わせて博多帯を購入しました。初めての夏物の着物なので着る機会を増

やしたいと思ひ、この着物を着ました。

高橋さん（色無地）お嫁に来る時持つて来た着物です。子供の「七五三」の時も着ました。

長谷川さん（色無地）私は六十歳で「茶道」を始めました。初めての「初釜」で着た思ひ出の着物です。背中の「加賀紋」が気に入っています。

山下さん（訪問着）三十年前長男五歳・次男二歳の「七五三」の時に着た着物です。子供達が一番可愛らしい時でした。初めて写真館で記念写真を撮りました。

加藤さん（訪問着）私の成人式の時、母が仕立ててくれた振袖です。二十歳の私は着物に興味もなく、「要らない。」と言ったのですが、母がやってあげたいから・・・と強引に仕立ててくれました。私も母になり、娘の成人式にこの着物を着せようと思いましたが、気付いたら母が振袖を訪問着に仕立てなおしてあり、驚いたのも今では笑い話になっています。

湯沢さん（振袖）成人式の時、両親が作ってくれた着物です。その三十年後、長女が成人式で着

ました。親子二代で着た思ひ出の深い着物です。

杉野さん（振袖）成人式の時着た振袖です。当時は母の帯を使用しました。母と一緒に呉服屋さんに行つたことを思ひ出しています。振袖にしては大人しい柄ですが、自分には似合つていと思ひ、選びました。私は息子二人なのですが、また孫に受け継ぐことが出来たらいいなあ・・・と思つています。

藤原さん（色留袖）滝沢さんとの思ひ出にするために二人揃つて色留袖にしました。

滝沢さん（色留袖）長女の結婚式の時、初めて着た着物です。なんと六十六年も前の時の着物です。

以上一人一人に発表して頂きましたが、着物とはその人の歴史を刻み、共に人生を歩んだ大切な思ひ出を持つているものだと感じました。正に「着物は生きている」との思ひを強くしました。

以上が「公民館まつり」の時の発表です。

## 二 私 の 着 物 の 歴 史

昭和十八年の頃は戦争が始まつていて、世の中

は「欲しがりません勝つまでは」という風潮でした。ですからお祝いをやらない家が多かったように思います。

でも我が家のおばあさんは「七歳の祝い」を十五歳や二十歳になってからやる訳にはいかない。子供の成長を願って神さまにお参りする儀式をやって悪い訳はない。ましてや兵隊に行つて若者が戦死するような時代だからこそ子供を立派に成長させることが大切だ。と言っていました。

我が家でまず始まったのは蚕を飼うところからでした。

「ガシャガシャ」という音で朝、眼が覚めます。朝、蚕に桑の葉を与えると「ムシャムシャ」とすさまじい食べる音が聞こえます。その音に圧倒されたことを今でも思い出します。

蚕の体は冷たくて、柔らかくて、ぐにやぐにやしていますので、最初は気持ち悪いと言つてさわるのもいやでしたが、毎日見ているとだんだん可愛らしくなって私も餌を与えられるようになりました。更に顔やおでこや手の上のせられるよう

になりました。

そのうち変化が現れます。繭を作つて動きが止まり、殻の中に入つてしまします。

その繭を煮て糸を取り出していたように思います。(今は昔、昔のことなのですっかり忘れているのですが)(八十年前)

大きな鍋の中で繭がぐつぐつと煮られている姿をじっと見つめながら、熱いだろうなあ可哀想だなあ・・・泣いているだろうなあ等いろいろ考えをめぐらせていたことを思い出しています。

やがて煮つめた繭から細い細い糸を取り出して束ねていきます。

その糸を湯ケ野の紺屋(染物屋)に持つて行き、反物にしてもらいます。

私の反物の柄は「五所車」のきれいな、可愛い柄だったので、私は「蚕の着物」と言つて大変気に入り、お祝いだけでなく、毎年お正月にも着ていました。

更にこの着物は晩年にはおばあさんの布団になっていました。

おばあさんは「美奈子の七歳の祝儀着に作った着物の布団に寝られるなんて、こんな幸せな日が来るとは思ってもいなかった」と言って喜んでいました。「どんなところが幸せ？」と聞くと決まって「美しい柄」「きれいな色合い」「本物の絹だから軽い」と言うのが決まり文句でした。

七歳という小さい頃に味わった「おばあさんの喜ぶ顔」は自分が米寿を迎えた今でもはつきり覚えていて「心をこめて作るもの」は人の心にいつまでも残ることを教えられました。

戦時中で物資の無い時代・孫の七歳の祝儀着を何としても作りたいと願った心があってこそ出来たことだと今、おばあさんの心の深さをしみじみ感じています。

### 三 社会を知ったサークル活動

退職（平成十年）と同時に最初に始めたのが亡き叔母や母の着物の整理でした。何しろ明治生まれの叔母・大正生まれの母は「着物生活」でした。冬はともかく夏でも「ゆかた」で洋服を着ること

はありませんでしたので、二人の着物や帯を捨てるところから始まりました。何回も風呂敷に包んでゴミ捨て場に運んでいたら近所の方が一緒に手伝ってくれました。そして「着物や帯をこんなに捨てるのは勿体ない。公民館の着付サークルで着付けの練習をしてから捨てたらどうか・・・」という話になり、私の着付けの勉強が始まりました。

月二回（第二・第四金曜日）の活動でしたが、何しろ教職生活で着物を着たのは卒業生を受け持った時の卒業式と管理職になつての入学式や卒業式の時だけでした。しかも「羽織袴」を着ると、兵児帯をしめるだけで御太鼓をしめる必要もなく、簡単に一人で着ることが出来ました。

本格的に「着付けの勉強」となると、それなりの練習をしなければきれいに見栄え良い姿になりません。

私ที่บ้านで練習する姿を母親が見て「何しろ木偶の坊が着物をきるようなものだから」と笑っていたのを思い出します。

それでも年数を重ねるといふことは、それなり

の成果が現れるものです。

今では、いろいろな組織の新年会や忘年会、更に教え子の孫の結婚式などに着物で出席できるまでになりました。「これでよし」と見極めることは出来ませんが、素人が一人で着られるようになったので「まあよし」といったところです。

#### 四 おわりに

私が着付サークルに入って勉強したことは人生最後の勉強として良かったなあ・・・という思いが強いです。

まず一人では着られなかった着物が着られるようになったこと。

大勢の人との繋がりを持ったお陰で社会生活の会話が広がったこと。

指導者の立振舞をしつかり学んだこと。

一つの物事を完成させるには、それなりの努力と年月を要すること。

母親・叔母の残した着物をしつかり着られたことで叔母や母に孝行できたこと。

姪や甥をはじめ、その子供たちの祝事にも着せられたこと、などなどそれなりの価値があったように思えます。

サークルの仲間の一人が「私は息子二人なのですが、孫に受け継ぐことが出来たらいいなあ・・・と思っていません。」と語っているように私も「この着物が孫（男二人）の嫁さんに受け継ぎたいものだが・・・」と話したら即座に私の娘は「おばあちゃんの着ている着物は明治・大正に生きた人が着た着物だよ。明治・大正・昭和・平成・令和と時代をいくつも越えたものが現代の子供の嫁さんまで受け継ぐなんて考える方がどうかしているんだよ。」と一蹴されてしまいました。

そうか・・・古い時代のものには価値が無いのか・・・と寂しくなりましたが、でも私は「古いから価値がある。」と反論したい気持ちで湧いてきました。確かに現代の柄に比べたら古いかな・・・と思う部分もありますが、柄に落ち着きがあること、深味が感じられること、品性があること、重みを感じられること等々今様の「きらびやかさ」

は無くてもどっしりとした重厚さが感じられると思います。

今、しみじみ思うことは「洋服」は流行が激しくて二十年も経つと「古くさい」と思うけど、着物はそれなりに着られる息の長いものだと思います。

更に昭和は「庶民が着物を通して絹の衣服を纏うことになった歴史的に見ても珍しい特殊な時代だった。」と昭和きもの愛好会の松前章子は語っている。

これからの若い人たちは昔から受け継がれてきた日本文化を代表する着物を大切に着てずっと長く長く続くことを願っています。



「ペンギンのちょきんばこ」

野田 あかり

## 今井浜温泉に滞在した昭和の人々

久保田 真琴

昭和九年（一九三四）の『伊豆の番頭』という伊豆の温泉地を紹介する本の中で、今井浜は次のように紹介されている。

今井濱Ⅱ學校の下を廻ると前に見高の村が展げます、實に風光明媚な濱で、一名伊豆舞子ノ濱と呼んで、海水浴や、キャンプの好適地です、温泉は峯から引湯して在つて氣分良く入湯が出来ます。附近一帯は別荘地帯で名士の別荘が多く有ります、昭和八年には時事新報、全九年には鐵道省の主催で此處へキャンプ村を經營致しました。

名士の別荘が多くあるとあるが、今井浜には、李氏朝鮮最後の王李垠（り ぎん、イ・ウン）の別荘もあった。明治四十三年（一九一〇）の日韓

併合により、李垠は日本の皇族に準じる地位を持っていた。第二次世界大戦の敗戦後、皇族としての地位を失い、伊東の土地や、大磯や今井浜の別荘を手放したと、彼の妻であった梨本宮家方子女王の手記に書いてある。（李方子著『動乱の中の王妃』講談社、一九六八）

この昭和九年の『伊豆の番頭』に、文章では取り上げられないものの、今井荘の写真が添えられている。この年に、今井荘は開業したようである。昭和九年は、下田で第一回黒船祭が開催された年でもある。黒船祭開催に協力した東京湾汽船（東海汽船の前身）は、昭和三年にそれまでの貸主客従から観光を主体とした客主貨従へと方針転換を図り、大島や下田の観光開発を進めていた。昭和三年四月には、東京く大島く下田間の日航便（毎日便）が開始された。昭和三年に二万五千人だった乗船客は、昭和九年には二十一万二千人と、約一〇倍に増えていた。

昭和二年の川端康成の小説「伊豆の踊子」人気、



⑨最新式設備病院完成  
⑩本代廃止、タービンを料倉別  
(今井の瀬海水浴場)



伊豆今井の温泉  
温泉旅館今井荘  
電話局温泉五三番

多き上り種類は石鏡・石斧・石棒・石臼・石壘・土器等で、實に美事な細工がして有るが、中には方一尺位の黒磐石の原石が其儘有る處と見ると此處は石斧を製造した跡と見られませう。黒磐石は三宅島の産ですが舟のない時どうして持つて来たかと思はれます。

(11) 伊豆の舞子と歌はれる

(今井 漢)

風光明媚の今井濱

海水浴にキヤンパ

今井濱

ノ濱と呼んで、海水浴や、キヤンパの好適地です、温泉は湯から引湯して在つて気分良く入湯が出来ます、附近一帯は別荘地帯で名士の別荘が多く有ります、昭和八年には時事新報、今九年には鐵道省の主催で此處へキヤンパ村を經營致しました。

(12) 伊豆七島を遊べる

海産電信が上陸す

阿波瀬なる復興に

時を見て、奥ん奉る海産と

海産電信

今井濱を出て切割のカーブを曲ると目の前に白い三角の付いた柱が因本見えませう、此處へ伊豆七島と連絡して居る海産電信が上陸して居ます、昭和九年頃から電話も通

芹沢項策 著『伊豆の香頭』伊豆温泉名所遊覧案内所  
昭和9. 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1056076> (参照 2025-08-12)

昭和三年の「波浮の港」レコードのヒット、昭和五年の映画「唐人お吉」のヒットなどは、大島、下田の知名度アップに貢献したと、『東海汽船一三〇年のあゆみ』(東海汽船、二〇二〇)にある。今井荘を開業したのは、昭和三年創立の那須温泉土地(株)である。伊豆東海岸にまだ鉄道が開通していなかった時代に、栃木県の温泉供給会社が今井濱に進出したことには、もともと高級別荘地だったことのほかに、こういった下田方面の観光振興の気運も少なからず影響したのではないだろうか。

昭和十年二月、与謝野鉄幹、晶子夫妻が、開業間もない今井荘に滞在した。この時詠まれた歌については、鈴木基先生が『与謝野晶子と河津(三)』(『文芸かわづ』第十号)で紹介している。

熱川に泊まる予定を、晶子の提案で今井濱に泊まることにした。鉄幹は、今井荘の清楚な設備に満足していた、と晶子のはちに書いてある。(『冬柏』六(四)冬柏発行所、一九三五)この時、幸

田露伴も宿泊していたが、晶子らの宿泊日の朝出発したとのことで、会えなかったことを鉄幹は残念がったという。

昭和十年十二月、今井荘に滞在した俳人荻原井泉水は、『メロンづくり』という随筆で、今井荘と今井浜のことを書いている。

今井濱の今井荘といふのは、熱海ホテルを甚だ小規模にしたやうな旅館だと——私は二階の座敷に通るなり、廣縁に出てある藤椅子に腰をおろして外を眺めながら——まづさう思った。

廣い芝生があつて、ベンチや汀り臺やぶらんこが置いてある。芝生から濱へおりられるらしく、松の木が枝を交してゐる間に海が見え、又、松の木の無い方にも長い渚と其先に岬とが眺められる。子供を連れてきても好きさうな、とも思つたりしてゐるところへ、Mがはいってきた。

〔荻原井泉水著『白馬に乗る』人文書院、昭十一）

作家の石坂洋二郎は、今井荘を定宿にしていた。彼は、昭和三十四年（一九五九）の随筆『奥伊豆参り』で、戦前から厳寒の候の一二か月は奥伊豆に避寒して仕事をする習慣になつていた、と書く。はじめの二年間は谷津の石田屋に滞在し、その後は今井荘に通うようになった理由を、「谷津の旅館で、室の窓から山ばかり眺めているのに飽いて、今井の浜の白砂青松の眺めに憧れたのかも知れない」と書いている。

石坂洋二郎の短編小説『忘れ得ぬ人々』には、今井浜を思わせる描写がある。

断崖を離れて坂道を下りると、Dの部落に入る。ここは、半島の海岸には珍しく、白砂青松の美景を呈していたので、砂浜に臨んだ一帯が切りひらかれて、高級な別荘地になつていた。松の灌木におおわれた山のとこどところには、青や赤の瓦をのせた洋風の建物が隠見し、私はここへ散歩に来るたびに、ああいうシャレた建物の中には、どんな紳士佳人が住んでいるので

あろうかと、憧れに似たものを感じさせられたものだった。

那須温泉土地は、昭和十八年に満州重工業の子会社となったのち、昭和二十二年東海汽船に買収され、東海観光事業(株)と名称変更した。

昭和二十四年(一九四九)の野田経済研究所『激流に棹さす注目会社三七五社・野田経済研究所特集・創立十五周年記念(野田経済研究所日報臨時増刊)』の東海観光の項では、「最近に於ける今井莊宿泊人員は月均千五六百人程度、何故斯くも好評を博するか、それは戦前の内容とサービストがその儘現存するからである。」と書いてある。

昭和二十六年の『投資の手引・会社案内』一九五一年版 第三集(山一証券株式会社調査部編、実業之日本社、一九五一)の東海観光事業の項には、「當社の經營する今井ヶ濱の今井莊は伊豆半島随一とさえいわれるほど」とある。今井莊の營業の順調ぶりがうかがえる。

昭和二十五年(一九五〇)の運輸省観光部編『温

泉案内』(毎日新聞社)では、今井浜温泉は、保養向の避暑地とされており、今井莊は一級旅館で、「旅館の庭につづいて白砂の浜が連り、前には大島をはじめ、伊豆七島が間近に眺められる。雑音の少ない海辺のよい静養地である。」と書いてある。

今井莊には、昭和天皇や昭仁皇太子も滞在した。

皇太子さまは、盲腸手術後の静養のため、昭和二十三年十二月二十七日から、伊豆今井浜の旅館今井莊に投宿して越年されたことがある。

温泉旅館に逗留されたのはこれがはじめてであったが、旅行にはなれておられたので別に驚かれるようなことはなかつた。皇太子さまの注文通り、別館二階のお居間は、十畳の日本間で、蒲團も用意してあつた。袖のある夜着は一寸珍しかったそうである。

障子の外は海が展けていて、波の音が皇太子さまの旅先の気分をそそつた。

温泉旅館といつても、暮の宿は静かで、それに

二階は皇太子さまと側近の室だけだったので、気がねなされることもなく、御静養には好都合であった。

「お食事は、一般逗留客と同様の定つたものを」という注文だったが、宿の調理場では、やはり心をとめて差し上げた。どうしても小金井のふだんのお食事よりもご馳走があつた。しかし献立は総べて一般なみで、側近とも同じものであつた。もちろん二の膳などはなかつた。

(田中徳著『皇太子さま』講談社、一九四九)

昭和天皇が今井荘に宿泊したのは、昭和二十九年十一月六日のことである。五日間の日程で、一日目は三島で国立遺伝学研究所の見学、二日目は駿河湾で海産動物の採集、三日目に天城営林署本谷修練道場を訪問ののち、昼食を今井荘でとり、東京教育大学附属下田臨海実験所を見学し、今井荘に戻つた。四日目は再び下田の臨海実験所へ向かい、そこから堂ヶ島を回り、船原岬を越えて下田街道を北上し沼津御用邸に戻つた。(『天皇陛下

伊豆地方御旅行記』静岡県、一九五五)

作家の三島由紀夫が今井荘に宿泊したのは、その二年前、昭和二十七年(一九五二)のことである。その時耳にした今井浜での幼児の水死事件を基に、短編『真夏の死』を書いた。三島由紀夫と今井浜については、『文芸かわづ』第二十三号ですでに書いた。小説ではA海岸としており、今井荘の名前も永楽荘に変わっているが、海岸の様子も、永楽荘の描写も実在の場所そのものである。三島由紀夫は、小説の冒頭で、「A海岸は伊豆半島の南端に近く、まだ俗化されない好個こうこの海水浴場である。海の凹凸が多く、波がやや荒いほかは、水の清らかさも遠浅であることも海水浴に適している。ここが湘南地方の海岸ほど殷賑いんぎんをきわめていないのは、ひとえに交通の不便な点に懸つてゐる。そこへ行くには、伊東から乗合自動車で二時間を要した。」と書いている。

好個とは、適当なことやちやうどよいことを表す言葉である。交通の便は悪いが、その分観光客

が少なく静かで、海水浴にも適した場所、ということだったのだろう。

この小説の主人公は、東京の良家の出身で、夫は米国の自動車会社日本代理店の支配人であり、家には女中もいる。伊東から乗合自動車で二時間かかる海岸の旅館に家族連れで滞在できるのは、裕福な人々だったのだろう。

前述の随筆『奥伊豆参り』を、作家の石坂洋二郎は、次のように締めくくっている。

そんなわけで、私の奥伊豆参りも、かなり年期が入っており、小説の舞台にもしばしば採り上げている。主に短篇小説であるが……。そこで最後に、そんな風に伊豆に年期を入れた人間として、地元の観光業者の人々に希望したいことが一つ。それは、温泉地を、団体客本位の享樂的なものと、家族本位の健康的なものと、ハッキリ二つに分けてもらえないかということだ。前者には、芸妓、酌婦のたぐいもおつ

ていいだろうし、パチンコ、射的もあっていいだろうが、後者の温泉地区には、絶対そういうものを入れないことにする。

それで名前が通つてしまえば、私の素人考えでは、結構双方ともに商売が成り立っていくように思えるのだが、どんなものであろう。いまのまままで放置しておけば、素朴な奥伊豆の雰囲気がつかりこわされて、伊豆全体が、遠からずゴミっぽい享樂地帯に化してしまいそうな気がする。

この随筆は昭和三十四年（一九五九）に発表された。伊豆急行の開通はこれより五年後の昭和三十六年十二月である。この時、今井浜に駅はまだなかったが、翌年七月七日には、今井浜海水浴場駅が八月八日まで一か月間臨時開設された。この処置は昭和四十三年まで続いた。常設の駅となったのは昭和四十四年である。（『伊豆急五十年の歩み 半世紀の記憶と記録』伊豆急行研究会編、二〇一二）

伊豆急線開通に伴い、南伊豆地域では低価格で泊まれる民宿が営まれるようになった。『改訂わたしたちの町 かわづ』（平成十年三月発行）では、河津の七滝と今井浜の民宿の事を、「当時一泊七八〇円という安さに料理の豊富さ家庭的なサービスも加わって年々客が増え、昭和四十九年ごろまで民宿黄金時代を築きました。」と書いてある。

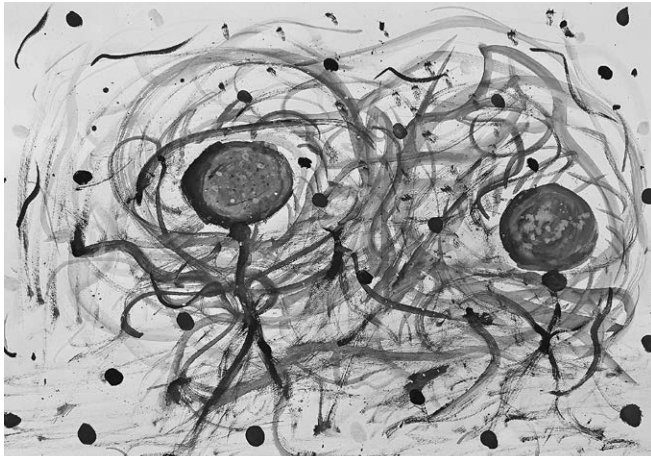
経済白書に「もはや戦後ではない」と記載されたのは、昭和三十一年であり、高度経済成長は、昭和二十九年頃から始まったとされる。時代の流れにより、今井浜は名士たちが集う保養地から、庶民が楽しめる海水浴場へと変わっていった。

### 【参考】

引用資料は、文中に記載。

『伊豆の國 第一集 特集 風景 改訂版』、伊豆の國刊行会編、二〇〇三

『文学とロマンの道 天城街道』、板垣賢一郎、昭和五十八年



「夜にうごく花」  
稲葉 花奈

## 子どもの「問題行動」は、言葉にならない心の叫び

長崎 良夫

小学三年生の太郎くんは、元気いっぱい遊び盛り。学校から帰るやいなや、ランドセルを玄関に放り出し、友達の待つグラウンドへ飛んでいきます。

昨日、母親と

「宿題を済ませてから遊びに行く。」

と約束したばかりでした。しかし、下校途中で友達から

「みんなで野球しようぜ！」

と誘われると、嬉しさのあまり約束のことなどすっかり頭から消えてしまいました。

夢中でボールを追いかけ、辺りが暗くなるまで遊んだ太郎くん。満足して家に帰り着いた途端、さっと顔が青ざめました。

「まずい……！」

母親との約束を思い出したのです。慌てて手も洗わず勉強机に向かいましたが、心の中は焦りです。

「何でこんな日に限って、宿題が多いんだ……」

担任の先生を少し恨めしく思いながらも、とにかく早く終わらせなければなりません。

そこへ、いつもは残業で遅いはずの母親が、思いがけず早く帰ってきました。

「ただいま。太郎、宿題はばっちり終わったかな？」  
機嫌よく勉強部屋に入ってきた母親の目に映ったのは、泥だらけの顔で、焦って宿題を始めたばかりの息子の姿でした。母親の表情が、みるみるうちに険しくなります。

「どういうことなの！ママとの約束はどうしたのよ。太郎のうそつき！」

母親の叱責は、宿題のことだけにとどまりませんでした。

「いつも片付けができない」

「朝の準備が遅い」

「ゲームをやりだすとやめられない」

と、日頃の生活態度にまで話が及びます。

「ごめんなさい…」

太郎くんは小さな声で謝るのが精一杯です。しかし、泣きながらも懸命に言葉を絞り出しました。

「…だって、今やろうとしていたのにママがどんだん言うから、やる気がなくなるんだ！片付けだって、僕がやろうとする前にママが全部やっちゃうから、できなくなるんじゃないか！」

それを聞いた母親は、火に油を注がれたかのように、さらに怒りを募らせてしまいました。

この親子のやりとりを離れた場所で聞いていた父親は、ふと、ある考えを巡らせていました。

確かに、太郎も小学三年生になり、自分の気持ちを言葉で表現しようとするようになりました。大人の叱責に対しても、自分なりに反論を試みます。しかし、大人の理路整然とした言葉の前では、その反論はまだ拙く、感情的になりがちです。多くの子どもたちが、太郎くんと同じようなもどかしさを抱えているのではないのでしょうか。

では、うまく言葉で伝えられない子どもたちは、

その思いをどこへ向けるのでしょうか。

ここで視点を変え、例えばパニックを起こす、頑なに口を閉ざす、あるいは暴力や不登校といった、いわゆる「不適応行動」と呼ばれる行為を、彼らなりの「言葉にならない反論」として捉え直してみるとどうでしょうか。

子どもたちの抵抗が「行動」という形で現れると、大人はそれを「問題行動」としてのみ捉えてしまい、その裏にある子どもの言い分や心の叫びにまで思い至るのは難しいものです。その結果として、私たち大人自身が、自らの言動を省みるきっかけを失ってしまいます。

だからこそ、親や教育者は、子どもの「不適応行動」を一方的に矯正しようとするのではなく、それを子どもの「声なき訴え」として受け止め、自分たちの関わり方が子どもにどう影響しているかを振り返る謙虚な姿勢が求められるのではないのでしょうか。子どもの行動の裏にあるメッセージを読み解こうとすること。それこそが、親子関係、ひいては教育の原点になるのかもしれない。

# 中村完陸軍中尉の陣中日記への思い

田村 年

まえがき

戦後80年、昭和100年の今年、伊豆新聞の中村完少尉の記事を見た。自分を動かす何かが体の中で蠢いている。

早速彼の実家中村屋肥料店、元呉服屋さんを訪ねた。中村聡、きな江御夫妻に彼のエピソード、人物像等について伺いした。

私の陣中日記への思いを話し、『文芸かわづ』への投稿の許可を頂いた。

伊豆新聞の記事を見て、中村完中尉の日記を多くの人に読んでもらい、如何に戦争が悲しく、惨たらしいものであったかを、これから日本を担う若者に伝えたいと、『文芸かわづ』に投稿する決心をした。

中村完陸軍中尉の軍隊歴、静岡連隊、行動経過、

カバンジャラ、ラバウル、ブーゲンビル島を経て、ガダルカナル島に上陸、病気と飢えとの戦い、毎日の機銃掃射、空爆、艦砲射撃。アウステン山でアメリカ軍に夜襲をかけ戦死するまでの日記です。

伊豆新聞

中村完中尉の陣中日記の記事

令和6年11月1日の伊豆新聞朝刊に・・・

「翻訳女性遺族を訪ねて交流」、見高の中村屋呉服店の長男で太平洋戦争時、ガダルカナル島で戦死した中村完（タモツ）陸軍中尉の陣中日記（日本語―英語―日本語に逆翻訳）を持って遺族宅を訪れて、戦死に至る経緯を説明し交流したという記事が一面のトップに記載され、大きく報道された。

（福島安世記者）



この日記を逆翻訳した、日本兵遺留品返還プロジェクト代表のジャガード千津子さんは、彼がどんな環境、家庭で育てられたか、是非とも知りたいと、遺族の中村家を訪れたと、甥の聡さんが言っていた。

記事の一部を抜粋させて頂くと、彼の戦地に赴く心情や移動の船で小説を読んだこと、ガダルカナル島で食糧不足になってゆく様子、部下や自分の罹患、月夜に波の音を聞き、両親や故郷のことを思い出したことなどが記されていた。

## 中村完氏

大正9年4月3日中村屋呉服店の徳三郎、まっ夫妻の長男として生まれた。姉2人、妹1人の4人姉妹第3番目に出生した。下河津村立見高尋常小学校を卒業すると、家業を継ぐため沼津商業学校に入学した。当時、沼商か浜商（横浜商業学校）かと言われた名門の伝統校だった。

卒業後、郷里の見高に帰郷し、青年団活動や地元若い衆の行事に積極的に参加し、リーダーシッ

プを發揮し活躍した。

## 萩原 俊男さんの思い

（中村完中尉の姉、久野さんの夫君が陣中日記への思いを残しています）

この日記は義弟中村完が、昭和17年9月19日から書き起こし、スマトラ島の北部ガボージャーを出発し、昭和18年1月18日ガダルカナル島で戦死した直前1月7日までの陣中日記である。

この日記を如何にして我々が入手したかは、昭和39年10月11日付の「伊豆新聞」が詳細報道する通り、これはひとえに米国人作家 ハロルド・ハイフェツ氏の御厚意によるものである。

義弟が残した日本語の日記は、米海兵隊情報部に発見され、これを日系二世が英訳し、数部英訳された物の一部を氏が入手したが、彼はこの日記が非常に美しく又、感動的（ハロルド氏の手紙による）だと思ったので、日本にいる遺族に読ませたいと思い、日本の軍人援護局に手渡し方を依頼したものである。

厚生省軍人援護曲よりの通知により、昭和39年（1964年）2月4日付でハロルド氏に英訳日記の送付方を申し入れた処、2月4日付で早速送付越しであった。氏の手紙によると「中村」が「マカムラ」、「完（タモツ）」が「カン」と訳されているので、義弟のものであるかどうか不安のように書かれているが、日記中、村木勇の名が出ているので、義弟のものに間違いはない旨、礼状と共に書き送った。この日記を通読して感じたことは、ガ島は餓島であると言われたように、如何に食糧不足に悩んだことが解り、又ハロルド氏が感動的であると指摘した通り、死を恐れる女々しい片言走狗も見当たらない、当時の軍隊教育のためであることも一応うなずけるが、彼の純真さが偲ばれる。

ただ、月の美しい夜、波の音を聞いて遠い海岸の郷里を想い、父母の安否を気遣かっているのは、けだし人の子として当然のことであろう。（昭和47年1月、横井庄一氏が26年間に及ぶガム島の穴居生活から帰還し、日本中に様々な問題を投げか

けている。

ガダルカナル島で戦死した義弟の日記がペン書きで翻訳してあるのを思い出し、後の甥や姪達に読み易いよう印書にした次第である。）

#### 陸軍中尉中村完（たもつ）の陣中日記（縮小版）

① 郷里の家族、両親思いである。

② 部下思いである。

③ 死を恐れず、女々しいことも言わない純真な心を持つている。

④ ガ島は餓島（食糧不足）

以上、彼の想いを抜粋して強調したい。

9月21日

初めて小隊長として、戦闘地域に行くので少し不安であるが最善を尽くすつもりだ。前方には決死の戦いしかない。勇気を持って最後まで戦い抜く。

9月22日

ベラワンデリ到着（ガバンジャから）

自動車部隊の村木勇と6か月前にここで会った。とても親しくさせてもらった。

この記事で彼が中村完中尉であることが家族に確認され証明された。何故なら村木氏は、母まつさんの妹の夫、彼にとっては義理の叔父にあたる人である。

無事帰還して、カネイ鮮魚店に勤務していたそうです。

9月23日

(山下正氏談)

故郷から2通、友人から1通の手紙を受け取ったが、故郷から受け取った時の気持ちは言葉では言い表せない。

9月24日

清澄丸(船長黒崎大佐)乗船。何処へ行くか解らない。南方に行くことは承知している。この船の名前は清澄丸で「とても澄んでいる」という意味で自分もそうありたいと思った。空には月が明るく輝いていて、まるで自分たちの将来を祈ってくれているようだ。

(清澄丸は特設巡洋艦、蒸気船を戦艦に偽装、大阪商船の船)

昭和19年年2月17日トラック島で沈没。

9月26日

小説をたくさん読んでいたので、戦闘に突入する気にはならない、この気分を常に持ち、落ち着いて物事を進めたい。

9月27日

ラジオから日本のニュースが流れ、自分はこの愛する国を懐かしんだ。(艦上)勿論、故郷見高の両親、姉妹の事も思っただろう。

9月30日

夕方、右舷と左舷の沖に島々が見えた。左舷沖には日本の富士山に似た山が見えた。午後6時30分頃、あたりが暗くなった。

両親は何をしているのだろうと思った。

10月11日

第一、第二大隊が何処かの島に出発した(ガダルカナル島に向け、中村高少尉達には知らされていない)

10月12日

兵達が疲れている時こそ、指揮官が兵を指揮する

時だ。

ラバウル港に到着、ベンガラ丸に乗船、ソロモン諸島に向かう、

空には雲ひとつない、まるで出港時に空が我々の幸運を祈ってくれているようだ。(プラス思考)

10月21日

マラリアに罹患し発熱。

10月25日

赤痢に感染、下痢続く

10月27日

この島に上陸してから、自分はほとんど寝込んでいたので、前線に出るのがとても待ち遠しい。

10月31日

午前中小説を読み、本当に出来るだけ早く前線に行きたい。

新兵の前田と杉山の回復を望む。

11月9日

駆逐艦涼風に乗船。ガ島に向け出航(午前9時)  
海軍士官が歓待してくれた。

ガダルカナル島に上陸(午後10時)初めて戦地に  
いる気がした。

11月12日

機銃掃射と艦砲射撃を浴びる中、初めての作戦なので落ち着かなければならないと自分自身に言い聞かせる。

両軍の砲弾が飛び交った。

午前2時、前線(片道8キロの距離)に砲弾を運ぶ。午後1時まで小隊全員が眠る。

今日から1日1.5食(半分)、食料を手に入れる方法なし。今夜は輸送船が来る予定だ。(鬼怒川丸、

山月丸は海岸に乘揚げ、爆撃され炎上、他7隻の輸送船が撃沈される大被害を被った。

11月27日

丸山道入口から1000メートル上がったところで野営した。

直ぐに配給された食料の1/3だけを料理し始めた。

11月28日

食糧2/3しかなく、とても空腹だ。もう少し持

ちこたえなければならぬ。我らの戦闘機はすぐ到着し、勝利は我々のものとなるだろう。

12月7日

両親は今頃何をしているのだろう。

12月8日

天皇に礼拝し、又、戦闘で亡くなった兵達に黙とうを捧げた。

伝令の西尾の体調が悪いため中隊に戻らせた。

前田圭吾の体調もあまり良くない。何かしてやれば良いのだが。

両親が心配していると思う、二人は今何をしているのだろうか。

12月9日

死は我々の運命であり宿命である。自分の運命は何時訪れるであろうか。もしこの全てを生き延びることが出来たら自分の義務を果たさなければならぬ。

12月11日

食糧は1/3しかもらえず、胃の中は空っぽだ。もう少し頑張らなければならぬ。

警備任務ついでに兵達に死傷者が出来ないことを祈る。

12月12・13日

敵艦2隻、輸送船1隻沖に見える。

砲撃され負傷者続出。

12月14日

密林を抜けエスペランス岬の道を進んだ、浜に焼け落ちた輸送船の浜で蟹が沢山いた、野芋も天幕に一杯採れ、一日分の配給も受けられると聞き良い日だった。

12月21日

今朝は野芋と焼き飯を食べた。昼は野芋汁を腹いっぱい食べた。

まあ、もういつ死んでもおかしくないと覚悟、ガ島ではこんなことは夢にも思わなかった。

12月22日

配給に付いてすぐに何とかしなければならぬ。

故郷の家族は今頃何をしているのだろうか。

12月24日

配給を受け取るためエスペランス岬に向け行進を

続けた。

山月丸が沈没した近くで昼食をとり、夜はそこで眠った。

美しい月あかりの夜で、波の音が日本での日々を思い、呼び起こし、自分は家族と眠っていると思っ

た。

12月28日  
野芋を採りにいったもの達は全員無事に帰って来た。

故郷ではお正月用の餅作りで、忙しいことだろう。両親はきつと元気で、自分の事を心配してくれて

いるだろう。

12月30日  
アウステン山（ギフ高地）に向け行軍を続ける。

夕方、吉良田と2人の兵が、我々に追いついたので嬉しかった。午前8時小長井軍曹と岡田伍長が配給を取りに行き、午後1時米1袋半を持ってきた。哀れで涙が目には浮かんだ。

12月31日

タサフアロンガ近くの丸山道入口に到着。大隊司

令官たちは兵站について心配している。何か出来る事はないだろうか。

自分の小隊の亡くなった5人の墓を訪ねて冥福を祈った。

今日は昭和17年最後の日だ。

勝俣が食糧を受け取りにコクンボナに行ってくれたので感謝している。

昭和18年1月1日元旦

天皇陛下を讃えた。大隊指揮のもと。

食糧もない。山口中尉の配給係も何も持たずに帰還した。

ガ島陥落までは気を引き締めて行きたい。

家族は今何をしているのだろう。

1月2日

自分の小隊から16名が亡くなった。これで終わりになる事を祈る。

1月3日

大隊からアウステン山の前線に移動するよう命令が

1月4日

師団本部に行き、大隊副官代理に任命される。ずっと会っていないかつた益兼に出会った。思ったより元気だった。二人して涙を流して喜んだ。

1月7日 最後の日記

敵は自分達向こうの100メートルにいるので、敵軍の銃撃は凄まじかった。夕方から敵の砲撃を受けたので、一日中休んだ。

まだ足は痛い、夜はよく眠られた。

敵の食料を確保したいので、夜襲をかける決心をする。

この日を最後に日記は終わっている。

1月8日

食糧を確保するため、夜明け（払暁）に小隊員20名と共に攻撃をかけ激戦の末、全員が戦死する。

## 感想

故郷の家族への想い、前向きな純真な姿勢、部下への思いやり、食糧不足の事など脇線を引き、解りやすくしました。最初の文章には、自分に言

い聞かせて、自分を奮い立たせるような前向きな言葉が多かった。

前線に向かうにしたがつて、食糧欠乏の事が出てきます。部下の中には、椰子の実、蟹、野芋採りの名人がいて、一か月前先に上陸した第一、第三大隊の状況よりは少しは良かったような印象を受けるけど、やはり日本人は主食の米を少しでも食べなければ、腹持ちしなく、腹が減っては戦が出来ずの、諺通り、体力も限界に近づいていたと想像いたします。

しかも最後まで、部下への気遣いと、月明かりの時や波の音聞いた時、故郷の両親姉妹への想いは、持ち続けていました。アメリカの作家のハロルド氏がこの日記を見て、美しく、感動的であると評した事に賛意を捧げます。

一方、戦況は制空、海上権を握られて、毎日、機銃掃射、空爆、艦砲射撃に襲われ、昼間は壕の中で休み、夜間に活動するしか出来ず、南海特有のスコールに襲われ、病氣と飢餓が重なり、正に生き地獄の戦場であった。それに耐えた強靱な精

神力を持っていた。

あとがき

戦争を体験した人も人口一億二千万の5・9パーセント七百二十万人位に減ってしまったと報道されていた。一番苦勞した大正生まれ、昭和一桁生まれの人もほとんど見かけなくなった。

最近の世相は、ひたひたと第3次世界大戦の足音が聞こえて来る。

第2次世界大戦では南方戦線、本土空襲、沖縄戦線、広島、長崎の原子爆弾、その後のシベリア拘留等で日本人の六百二十六万人の尊い命が犠牲になったと言う。再び、殺すか殺されるかの戦争が起きないように、祈られずにはいられません。

中村完中尉が書き残してくれた陣中日記を多くの河津の人に、否、日本人に読んでもらいたいです。ペンと鉛筆書きで残してくれたお陰で悲惨なガダルカナル島戦の実像が戦争を知らない人々や子供たちの胸に残り、日本の平和を持続していく起爆剤に成ってくれるよう願います。一旦、台湾

海峡に火が付けば、好むと好まざるに拘わらず日本は戦争に巻き込まれてしまいます。

この日記は再び戦争は起こしてはならない、自分の体験を将来の子供たちには経験させたくない、永久に平和であって欲しいというメッセージではないかと思えます。

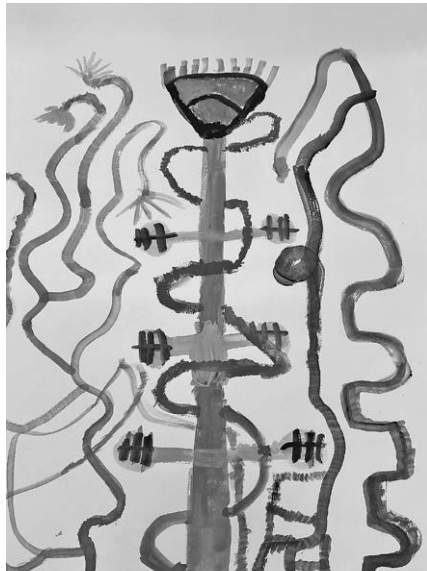
彼は出征して、静岡連隊入隊、支那事変で南支へ、豊橋士官学校を卒業し見習士官になり、大東亜戦争で再び出征し、スマトラ島に、転進してガダルカナル島に上陸、アウステン山のアメリカ軍と戦い、24歳の若さで戦死してから83年が経ちました。

何度も何度も日記を読み返しました。ジャガーズ千津子さんとハロルド氏がこの日記に何故、感動したか理解できました。

彼の日記を読んで、こんな言葉が思い浮かびます。

冷静沈着な判断、ロマンチスト、親思い、家族思い、部下思い、勉強家、プラス思考、武道に長けている。剣道、身体強健で病に負けず、精神力、

胆力、人間の幅、包容力、責任感、見識、勇猛果敢、  
負けず嫌い、自制心、死を恐れぬ勇敢な心、リー  
ダーシップ等々数え上げれば切りがありません。  
編著時に多くの方々にご協力頂きありがとうございました。



「天にある花」  
白井 陽南

【一般部門】

評  
伝

## 名誉町民の「石原忍」と文化の家

横山宥久

内容のほとんどは、須田經宇著書「石原忍の生涯」と故鈴木千代雄先生が、『文芸かわづ』の七、八、九号に投稿されました評伝（主な内容は、文化の家運営記録簿）から抜粋しました。

- 一、はじめに
- 二、業績
- 三、幼少期と青春時代
- 四、結婚と家族
- 五、一新会
- 六、昭和二十年まで
- 七、河津眼科医院
- 八、文化の家
- 九、高級泥棒説
- 十、お別れ
- 一、はじめに

平成二十年の秋、十七年前です。石原先生を偲んで河津を訪れた人がいました。中井嘉雄さんという方で、当時七十才前後の人でした。中井さんの親戚の人が石原先生の事をよく知っていたそうです。中井さんは浜にありました「河津海苑」に

泊まり、主人から鈴木千代雄先生を紹介されました。そして、鈴木先生から「石原忍先生の思い出話や写真を見せて頂き感激した。」と、一年後の「名古屋医報」の冊子に書かれています。

この冊子の結びの文で、胸が締め付けられ、頭を強くたたかれました。原文のまま載せます。

『伊豆急行の河津駅前に、地元で活躍された名誉町民であり「伊豆の聖医」、「河津のシュバイツァー」の石原忍先生の説明案内文がないのは、残念至極であった。』

私は現在も胸が響き、どこかに説明案内文が欲しいと強く思っています。そこで、唯一の名誉町民（昭和三十二年に名誉村民とられました。）でもある先生の一生について、多くの方知って頂きたいと考え投稿しました。

先生は戦後、公職を返上して下河津村に生活の根拠を構えました。そして、医者として患者に接し、「医は仁術」ということをはじめて実感し、大きな喜びを得ました。その一方では、河津の文化の向上に献身的な情熱を捧げました。

## 二、業績

石原先生は眼科、目のお医者さんでした。先生の研究で一番有名なものが、「色を見分ける感覚の障害」で、『色覚異常』検査と言われている研究です。別の言い方で言いますと『色盲』検査で、後に「石原式色覚異常検査表」と言われました。色覚検査は小学生の時に全員がやりました。現在はどうかと言いますと、差別に繋がるということ、文部科学省は、令和六年度から検査するのを廃止しました。

先生は目の感染症の一種で、結膜炎と言われる「トラコーマ」の研究と「近視」の研究にも取り組み「視力検査表」も考え出しました。

昭和三十六年に文化功労者として国から表彰されています。

## 三、幼少期と青春時代

明治十二年、1879年、長男として東京で生まれました。父は砲術・大砲などを学んだ軍人で、母は金森レイという人でした。

三歳の時、母は小倉百人一首を教えました。恋

の名歌も混じっていましたが、そんなことは関係なしで棒暗記させられました。百日で百首の歌を全部覚え、そらで唱えましたので近所の人はすっかり感心したと本に書かれています。母のレイは歌ばかりでなく礼儀作法と学問する習慣を身につけさせました。その後、妹や弟が七人生まれ、総領息子として厳しく育てられました。

## 【青春時代】

明治三十一年、東京第一高等学校、現在の東大に入学しました。そして、ボート部に入り選手として活躍しました。ボートは先生にとって研究との二本の柱でした。

数年後ですが漕艇部の部長に就任し、不撓不屈の精神力による猛練習を強調し、ボート部の再建を図りました。そして、イギリスにおける世界大会に優勝し、その後、東大エイト選手はオリンピックにも出場しました。

大学入学に戻りますが、大学2年の時、五十三歳の父親を結核で亡くしました。よって母親のレイは当時三十五円の扶助料を国から頂きました。

扶助料とは公務員が死亡した場合に遺族に支給される年金恩給のことです。一家八人の生活を支えなくてはならなかった母親は、住んでいた広い宅地を売り、少し狭い所に家を建てて移りました。その後、さらに小さな家に移住しました。

大学二年生の忍は質素な生活で、酒もタバコも飲まず、囲碁も将棋もしない偏屈者と言われるようになるところでしたが、そうならなかったのはボートに打ち込む余裕を与えてくれた母親のお蔭であったと書かれています。

そして、明治三十八年、大学卒業後、軍隊に入り軍医となりました。そして、大正元年ドイツに留学することになりました。東京駅で、陸軍省医務局長であり、歴史小説家であった森鷗外の見送りを受けました。二年後帰国し、東大の教授となりました。

#### 四、結婚と家族

明治四十年十月二十八歳で、陸軍少将の長女の井口琴、十九歳と結婚することになりました。その時の先生らしいエピソードがあります。

結婚式の当日に、花婿がいなくて探し回りました。どこにいたのでしょうか。病院の研究室で一人机に向かつて勉強していたという嘘のような話から新生活が始まったと書かれています。

子供が生まれ、長女は美恵子、次女は喜美子、四女は美彌子です。子供としては三人の男の子と五人の女の子がいました。長男は章、三男は成と言いましたが、共に九歳の時に亡くしました。次男は啓といいました。五女は十七歳の時、亡くられています。次女の喜美子は帝国医学専門学校を卒業後、東大で眼科を修業し、河津で先生の助手をやっていました。先生が亡くなられたあと下田で眼科医院を開業しました。

母親のレイは谷津で生活していましたが、昭和二十四年九月、八十九歳で亡くられました。妻の琴は昭和三十一年一月二十六日、六十七歳で亡くなりました。

#### 五、一新会

「一新会」という会は、大学の教授であった石原先生の弟子たちが作った会です。

河津と先生との関わり合いは、昭和八年七月、先生のためにお弟子さん達が、「一新荘」と名付けた別荘を寄贈した時からです。「立て岩」の共同風呂から六十メートル奥の場所です。現在も寄贈した記念の像が残されています。将棋の駒の形をしたブロンズ像で、「一新荘由来記」と刻まれています。なぜ、この「河津の谷津」の場所を選び別荘を建てたのでしょうか？

それは、先生の弟子の中に萩原朗先生がいたからです。萩原先生は石原先生の一番弟子だったのです。朗先生は谷津の「まげや旅館」の長男で、その旅館は荒倉橋から二百メートル奥にありました。現在は駐車場になっています。

「一新会」は、平成十八年から毎年二十万円を河津町文化の家図書館に寄付をしています。図書館では、「一新会」コーナーを設置しています。

## 六、昭和二十年まで

昭和十六年二月、東京通信病院長に推され、やむをえず引き受けることになりました。とはいえないったん承諾するといいかげんなことはできない

性分でした。そして、医局で囲碁、将棋、麻雀などをすることを禁じました。

昭和十八年群馬県の前橋に医学専門学校ができ、初代校長として石原に白羽の矢をたてました。将来は大学に昇格する予定になっていました。学生の選抜についてもきびしい方針でのぞみ、第一回の入学生百二十人の内、地元の群馬県出身者はわずか八人で、地元の有力者たちから苦情を言われる一幕もあったと書かれています。当時、東大名誉教授の肩書は、県知事よりもはるか上でした。

そして、石原は信念を通して全寮制をとり、額を掲げました。右から読んで「養心研学」、寮の名も「養心寮」と名付けました。「養心研学」の額は「文化の家図書館」にもあります。

そして、学生に「医道」の教育を講義しました。「医道」とは人間のふむべき道であり、一人一人の教養の向上と人格の陶冶によって完成されると説きました。陶冶とは「才能や性格をみがき鍛えること」です。

石原忍が初代校長だった前橋の医学専門学校が

現在の群馬大学医学部です。

河津中学校を卒業して令和七年現在、プロ野球の「くふうハヤテ」の投手として活躍している「竹内奎人」は群馬大学医学部を卒業しました。石原忍は、千葉容山と関わりがあり、容山は竹内の祖父と関わり合いがあります。容山は当時、栖足寺の住職であり、その後、下河津村の村長になりました。石原先生と容山は谷津にありました元役場の買い取りで関わり、「文化の家」の建立に繋がって行くのです。

そして、容山が昭和三十年、県会議員に出馬した時に、賀茂郡内の街頭応援演説の大黒柱として活躍（『文芸かわづ』二十三号参照）したのが故村串泰司氏でした。竹内は泰司氏の孫になります。石原博士と河津の関わりを調べている最中、私は博士と竹内が、見えない糸で結ばれていることに感動しました。

## 七、河津眼科医院：昭和二十一年六月

昭和二十年八月十五日、第二次世界大戦が終わりました。そして、次の年、昭和二十一年三月、「前

橋医学専門学校」で、石原先生の送別会が開かれました。そこで先生は退任の挨拶をされました。

「このたびお暇を頂いて、かねての希望通り田舎に引きこもることになり、家族の者も大いに喜んで出発したような次第であります。校長在任中には、・・・、と、十五分間挨拶したと書かれています。

そして、四月に谷津に移り、六月には「河津眼科医院」の看板を掲げました。昭和八年に「新会」から寄贈された別荘があり、診療室を増築して準備ができていたからです。「河津」という地名を医院の名にしたのは、村の名が少しでも世間に広がればという考えからでした。

河津は暖かで温泉もあり天国のようであった。もっとも大きな喜びは「医は仁術ということを開業してみても初めて実感できたことである」と、書かれています。

奥谷津に朝日が届くのはずっと遅いが、一新荘の主人公だけは朝早くから目覚めていました。診察が始まってしまうと時間の余裕がないので、朝

食の前に散歩することにしていました。早起きの農夫が挨拶すると、先生も丁寧に返す。三十分の散歩に多い時は七、八人にお辞儀することもあった。

診療は九時からでしたが八時半には順番を待つて玄関に並びはじめる。立ちんぼでは気の毒なので、十二畳の待合室に案内します。九時になると「一番の方」と言って診察室に入れます。先生の診察は、ここから始まりでした。

※著者の須田氏が、先生から聞いた話を整理して、分かり易く書いていたと思われまます。

開業医としての方針として四項目を考え、その一つに『病人は気の毒であるから、その上多額の経費を支出させないように、診療報酬はなるべく安くする』がありました。患者から「先生、三十銭の注射をして三十銭しか取っていただかないんじゃない、食べてゆけなくなりまますよ」と声が出ました。しかし先生は大きな手を上げて、その話は、ストップという合図をしただけでした。

広告も宣伝もしなかったが、名声を慕って遠く

からやってくる患者は次第に多くなり、北は北海道、南は九州から来るようになりました。遠くから来る患者は、当然旅館に泊まらなければならぬ。治療によっては三、四日かかり経費も嵩む。これは「患者に多額の負担を強いる」ことになり

先生の方針に反する。そこで先生は、懇意になっていた先輩である餅田の渡邊正義さんに図り、二人で旅館主の所に向いて宿泊代の交渉に当たりました。先生は治療の方針をよく話して、できるだけ安く泊めてほしいと頼みました。こうして実現したのが三百五十円という格安の料金でした。

※少し後の、昭和二十六年当時の物価は、小学校教員の月給は五千円位、米十キロで四百五十円、ラーメンは三十円だったようです。宿泊代の三百五十円が十年間も続いたのです。

そして、先生が河津に来た頃は、雨が降れば泥んこになる道で、下駄などでも歩けなかった。そこで先生は村に十萬円を寄付し、谷津のバス停までの六〇〇mの道を砂利道に直してもらいました。

診察は九時からだったので、患者が増える

につれて、開始時刻を繰り上げて八時になり、そして夕方六時、七時ごろまでになり、時には昼ご飯もろくに取らずに診療を続けることもあったと書かれています。

昭和四年生まれのSさんに、石原先生の事を先日聞いてみました。「上品な人だった」「立岩の共同風呂のお湯の状態を見に来て、ぬるいと自分の家の湯を止めて共同風呂に流してくれた」「(前述の)まげや旅館や河津館まで、患者の様子を夜になって、見に来てくれた」等の話をされました。昭和二十五年頃のエピソードがあります。先生の近所にあった「湯の堂」に、日曜日になると子供たちが集まり遊んでいました。たまたま先生がのぞきました。そして子供たちの勧めもあり、堂に上がりました。そこで、中西貴子さんとの楽しい会話があり、貴子さんが歌うという場面があります。私は貴子さんから直接話を聞きましたが、ページ数の関係で紹介できないのは残念ですが、詳しくは『文芸かわづ』第八号を読んでください。

がむしゃらに働き続けていた先生は、昭和二十

八年三月(七十三歳の時)、かぜから肺炎を起こして寝込みました。そして、三か月間、診療を休みました。先生は七十歳をこえてからも、若い時と同じように勉強をし、毎晩二時、三時ごろまで色覚異常検査表の改良を考えていたのでした。

病気から快復した先生の心を慰める出来事がありました。一新会の完全復活でした。その後、先生は、全財産を一新会に寄付しました。

診療を再開したとはいえ先生は高齢でした。数年後、昭和三十年過ぎ、はつきりした記録がありませんが玄関に張り紙をしました。

「院長老体につき、先着十人までに制限します」しかし、騒動になりました、先生に診察して頂きたい人が、朝四時、五時からゴザをしき、ふとんをかぶって順番を取る騒ぎが起ったからです。先生は頭をかかえたが解決の妙策はない。せめて公平を期する意味で、どんなに著名な人の紹介状を持ってきた患者でも特別扱いはず、先着順を厳守しました。

八、文化の家…昭和二十六年一月開館

昭和二十一年、石原先生が河津に来て驚いたことの一つに、本屋が一軒もないことでした。全体的に文化が低い。これは先生にとつて我慢のならないことであつた。何とかしたいと思つていた数年後、栖足寺の入口の角にあつた元の村役場を買い取ることを考えました。そして地元での相談役であつた渡邊正義（屋号が餅田）さんと図り、購入するためのはたらきかけをしました。昭和二十四年二月の頃だと推定します。幸い、当時の村長は栖足寺の住職の千葉容山で、文化活動には極めて好意的で積極的でした。購入資金として先生は、家族には内緒で東京の自宅を五十万円で売りました。家族には内緒の処理でしたが、後日に発覚しました。

購入した後、元村役場を図書館用に改築し、正面玄関には、「正しき者は強し」の書を掲げました。図書館運営世話人の人選は、渡邊正義さんが当りました。最初六人が選ばれ、その内の一人が鈴木千代雄先生でした。千代雄先生は当時、村の青年団の団長でした。

昭和二十六年一月、第一回図書館運営世話人の会合が開かれ、皆さんが初めて顔を合わせました。

以下は、鈴木千代雄先生が書いた文章です。

【私が一番若い存在だった。その日、私は初めて親しく先生にお目にかかった。図書館となる玄関の間に一人の老人が正座していた。その方が石原先生であつた。先生は畳に額をつける程にして、礼を述べながら世話人を迎えていた。若輩の私を「鈴木先生」と呼んで、来館の労をねぎらつてくださった。功成り遂げ、日本はもとより世界的に名を知られ、学会の重鎮の要職にあつた人とは思えない人間味溢れる先生の印象であつた。

『稔るほど 頭を垂れる 稲穂かな』

その時の感動は今も残っている。】  
約六十年も前の出来事を思い起こした記述です。

その席で石原先生から伝えられたことは、図書館開設の主旨、管理運営の理念、本の購入、運営世話人会、名称のこと、館内の配置等で、時に先生七十二歳でした。

一般的には隠居する年齢ですが、村の為に莫大

な私財を投入すると言うのです。如何に先生が河津を自分の故郷とし、終りの地として愛し、村の将来を託す青少年を大事に思っていたかがうかがえます。

博士は以下の考えを基調にしました。

#### 【図書館・開設の主旨】

- 一 河津に来て青年に接してきたが、どうも本を読んでいない。
  - 二 村に本屋が一軒も無い。これでは本を読むうにも不可能で、気の毒だ。
  - 三 村の青年に本を読み勉強してもらわねば村は栄えない。それが心配だ。
  - 四 河津の子供や青年の為に知的活動の力になりたい。
- 開設の主旨に加え、次の三点を加えました。
- ① 河津の人達の勉学意識が高まり、読書週間が身に付くように役立ちたい。
  - ② 特に中学生や青年の読書意欲を高めたい。
  - ③ 文化の家を河津の知的集会所に育てたい。

#### 【図書館運営費】

図書購入費を毎月三万円を支出し、臨時支出は別途に出しますと。当時、大工の手間賃は、日当で一八〇円でしたから、三万円は大金でした。

#### 【図書館運営の方針】

- 一 図書館を『文化の家』と呼称する。
- 二 八は省略

河津町の図書館は「文化の家」と言われていますが、平成十五年、河津町が図書館建設に当たって名称を募集しました。一番を占めたのが、「文化の家」だったので。多くの町民の胸の奥底に深く刻まれていたのだと強く感じています。

谷津の「文化の家の開館」は、間違つて伝わっていました。が、「昭和二十六年一月」と教育委員会事務局が令和七年二月に訂正しました。

図書館の特徴は全部が開架式で、村人の自由閲覧にまかせたことです。持ち逃げなどで本が少なくなることを心配した関係者もいましたが、先生は世話人にこう言いました。「なくなったら、また買い入れるからかまいません。なによりも大切

なのは、読書に対する熱意も習慣もない村の人たちを、どうして読書になじませるかということです。名前を聞いたり、貸出票を書かせたりしたら、人手もいるし、読みたい気をなくしてしまうでしょう。」と。

その後の数年間、先生は文化の家で開かれる青年学級や婦人学級の講師を引き受け、いろいろな話をして地域の文化の向上に努めました。

併せて、村人の徳心の啓発のために、文化の家の通りに設置されていた谷津区の掲示版の隅に、色紙に書かれた直筆の格言やことわざを貼りました。七十日に一枚貼り替え、村人に金言格言を知らせました。これが数年に渡って続きました。

その色紙に書かれた幾つかの一つに、晩年、先生が好んでいたのが「天に星 地にさくら花 人に愛」です。この世で美しいものは、「天の星、地球の花、人の愛」という意味です。

私の家の玄関には、先生が七十八歳の時に書かれた色紙が飾ってあります。

図書館には直筆の色紙が多く保管されています。

「至誠一貫」

「ありの穴から 土手が崩れる」

「人を知るはやすく 己を知るは難し」

「己の欲せざる所 人に施すことなかれ」

「三人行くときは、必ず我が師あり」孔子

「人にまけてもおのれにかてば」

わたる世間に鬼はいない」等々

## 九、高級泥棒説

昭和三十年代過ぎ、伊豆急行鉄道の建設でトンネル工事が進行中で、飯場が谷津にありました。そのためか、返還されない本が増えていました。代表の渡邊さんから、建設事務所に申し入れたこともありました。世話人会の会合で、終日管理人の採用や貸し出し簿の設置などの提案がありました。それに対して、先生が応えたことは次のような「高級泥棒説」でした。

『無断で持ち出すことは、人間として恥ずかしい行為ですが、本泥棒は泥棒の中でも高級です。それは本を読んで学ぼうという姿勢があります。本を読んでいくうちに、ものごとの善悪・正邪の道

理が分かってきて、悪いことをしたと気づいて良い人になるものです。本がなくなったら直ちに補充してください。そのうちに戻るでしょう。』と、とがめることをしなかった。私達世話人は何となく首をかしげながらも、先生の考えを肯定しました。

#### 十、お別れ：満八十三歳

一回目の東京オリンピックの前の年、昭和三十八年、一九六三年一月三日の朝、子供たち、門下生、渡邊正義さん等に見守られて、眼を閉じました。

葬儀は一月八日、河津町始まって以来の名誉町民としての町葬が、河津南小学校の講堂で行われました。葬列は一新荘から谷津の繁華街を通り、小学校まで延々と続きました。

石原忍博士が亡くなられてから、今年（二〇二六年）で六十三年目です。ご冥福をお祈りいたします。

合掌

谷津防災センターの玄関前に「河津文化の家跡」

の石碑が建っています。その裏面の文面です。

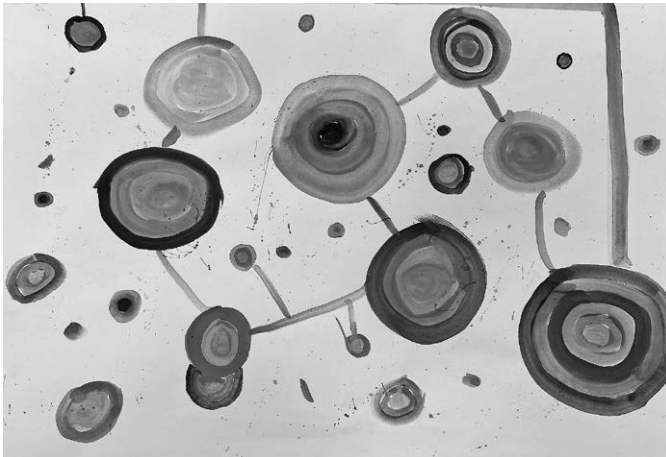
#### 記念碑建立について

石原忍先生は私たちの郷土谷津の地をこの上もなく愛されて晩年をこの地で過された先生はこの河津の里が文化に恵まれていないことを心にかけて昭和二十六年図書館を建て「河津文化の家」と名付けられ毎月多額の資金を投じて少しでも村の文化の水準を高めようと努力せられた里人は先生の深い慈愛のもとに幸福に育ったしかし悲しいことに先生は昭和三十八年八十三才で長逝せられた。その後この文化の家もいろ／＼な都合で閉鎖のやむなきに至った私たち郷人は先生のともしめたる灯を永遠に伝え御恩を忘れないようにと相寄り相謀ってこの記念碑を建て先生の御遺徳をしのぼうとするものである

昭和三十八年十一月

之 建 之 区 津 谷





「一日花」  
志賀 駿

【一般部門】

詩

ふるさと

土屋 千世子

二年ぶりにふるさとに來た  
ゆるりと流れる川すきとおる水  
なつかしい山々  
庭の松はすっかり大きくなった  
なす畑も色とりどりの花畑になっていた  
四月というのにこたつを囲み昔話  
母が帰りに持たせてくれたゆでた筍  
梅干しいもがら母の手打ち蕎麦みんな宝物  
でも一番の宝ものは八十八才  
黒髪自慢の母の笑顔



「打たれて負けた面」

真下 結衣

【一般部門】

短

歌

白さるすべり

村松清風(星雲)

早朝の野良仕事こそ大切と隣家の人は朝作りする  
留鳥となりたる磯鶉快適な朝の外気に高音を張れり  
梅雨の降り十分ならねば夏野菜育ち悪しと野良人は言ふ  
実る日を待たざるままに落ちる柿乾上がりし果て割れたるへたは  
連日の暑さ猛れど庭前に不動の様の白さるすべり

ローズマリー

村松秀代(星雲)

一人きりで飲みしコーヒーのレシートが出てくる若き日のバックより  
待つことも待たることもなきなれど庭にはけふも蝶が来てゐる  
約束のローズマリーが根付きしと一鉢かかへ友の訪ひくる  
こんなはずこんなはずではなきことの体当りしてくるものばかりなる  
幼き日ポンポンダリアの咲く家といはるることを祖母よるこびし

## 合歡の木

横山春子（星雲）

枯れしかと思ふ合歡の木芽の出でてふわふわの花に会える日を待つ  
温泉の湯気に包まれ合歡の木は葉を繁らせて蘇りおり  
葉の上に薄紅色の合歡の木はゆうらり揺れて夏の日暮れず  
合歡の木の花をめぐりて揚羽蝶舞い続けおり蜜を求めて  
半夏生の白き花穂ゆれ花言葉は内に秘めたる情熱と知る

## 行く夏

板垣みや子（星雲）

草むらにプラチナ細工の光放ち蜘蛛の網ゆれる朝露吸って  
少しだけが昼寝の沼に落ちこみて夜か朝かと浦島気分  
涼求め山葵ソフトを頬張れば緑の閃光鼻から脳に  
群れを離れ飛び魚のごとき雲泳ぐ孤高の旅ぞ捕らわれず行け  
身も心もから回りして夏のゆく口に投げ込む生ラムネグミ

石ころ蹴りて

太田幸子（星雲）

山道を行きつつひとつ石ころを蹴りても消えぬ悲しみを負ふ  
まう一度会ひたき人よまう一度抱きてほしきこの世の星に  
朝の雲くれなゐに染まるひと時のあれば裡なる力湧きこよ  
舞ひ降りしあの白鷺は母ならむ川風に揺るる野水仙の香  
白鷺の飛び立つ水面ゆつたりと心をここに残すがごとく

米寿

清田美保子（星雲）

部屋すみにさがし物ありくると牙むく老いは近づきている  
診察の闇を引きずる天城越え泰山木はゆれにゆれいる  
玄関のたたきは冷たしただいまの声をすいこみ静寂のこる  
米寿むかえわれの手をしかと握る夫思わず抱きしむ車椅子ごと  
初釜の湯はたつぷりと華やぎて結び柳は春をつれくる

生きていく日々 小林 康代（星雲）

ステーキを奢ってみよう独りでもお祝いしたい結婚記念日  
友や子が祝ってくれる誕生日八十路となればちとむず痒し  
一年が走って行くよな気がするよ加速していくわたしの時計  
何しても時間のかかるこの頃は老いてきたなと悟る他なし  
お義母さんの世話はわたしがすると言う嫁の瞳をまっすぐ見つむ

明るく楽しく元気良く 櫻 井 由 子（星雲）

満開の桜の下に鶯の声を聞きつつ洗濯をする  
誕生会に呼んで呼ばれるこの日頃友との会話は御馳走となる  
合言葉は「明るく楽しく元気良く」介護予防の体操つづく  
久びさの友とのランチに時忘れコップの水のおかわりをする  
いつもより長湯となりし柚子風呂に手足の指をにぎりて開く

線香花火

杉山 みはる（星雲）

父親に似て肉厚きてのひらの汝を頼りに新盆かざる  
輪になりて線香花火を点しゐるあの子この子が見えますかあなた  
新盆の君と話せば独り居の身にひたひたと夕闇せまる  
真夜ふかく仔連れ守宮の現るる今年は家族の増えてゐるらし  
残されて一日ひと日の過ぎゆくをいろはもみぢは秋色を帯ぶ

夫の手温し

杉山 ゆり子（星雲）

メールして息子の無事を確かめる既読の二文字に今日も安堵す  
ならい止み砂の織り成す風紋は踏むことさえも許さぬごとし  
臥すわれにぎこち無き手で炊きくれる温もる味の夫の梅粥  
冬ざれに行くあての無き野良ねこは納屋裏の陽に温もりている  
エプロンの届かぬ紐を結いくれる肩こりの背に夫の手温し

## 夕暮れの天城嶺

高川千里（星雲）

夕暮れの天城嶺見つつ散歩する病後のわれの手を取る夫は  
背越しに「無理をするな」と夫の声寒仕込み味噌の熟成を待つ  
伊豆産の種子を漸くさがしたり熟れし大豆の香を掬ひみる  
あまたある返礼品よりわが味噌を選びしと孫の大人びた声  
如月の澄める夜空を娘と仰ぎ繋ぐ手と手に北斗星降る

## 白内障手術

高崎 たつ江（星雲）

メガネ屋にて眼科受診を促され眼裏に揺れる免許更新  
すぐ終ると友らが言うも緊張の長さ十分白内障手術  
心臓の飛び出しそうな心地なり白内障手術「誰か助けて」  
本来の空の青なる鮮やかさ眼の手術受け見えて驚く  
予定なき朝の心の緩やかさ血圧の数字やさしく見える

はげしき流れ

土屋 のり子（星雲）

生れきて戦前戦後今の世とはげしき流れに身をゆだねつつ  
とし重ね親につとめて子を育て家を守りて今のわれあり  
杉苗を植ゑて育てぬ子も同じ大樹となりて緑かがやく  
夏空に草生ひ茂る休耕田に亡き舅の叱咤の聞こゆ  
快く働く仕事われにあり朝の涼風ほほを撫でゆく

モーニングコーヒー 土屋 雅子（星雲）

泣かないさ強く正しくたくましくだから私は可愛げが無い  
モーニングコーヒーにちよつとだけ憧れた願い叶わず八十路を渡る  
この猛暑八十半ばのわが身には点滴という名の友が増え  
お嫁に来てあげたの、もらってやったと言わない夫の優しい横顔  
忍耐という字包んで二人づれ共に老いるもめでたしと知る

## 風花

土屋 みさき（星雲）

湧き出でる峯の萌黄や山の藤去り行く春を静かに見送る  
繁山に流るる雲の影映るお天道様のマツピングのごと  
蒼天に風花の舞う里山の一輪だけ咲く河津桜よ  
若鮎が川上る光を狙い撃ちカモメの軍隊行ったり来たり  
町中は木犀の香に満たされて心の和む帰り道かな

## 好きな色

土屋 康子（星雲）

水滴は時を保ちてリズムカルに蛇口より落つ夜の厨に  
真夏日にふと振り向けば庭の角たった一輪山吹の花が  
蒸したての安納芋は黄色濃く活力の沸くわが好きな色  
老木が最後の力を振り絞り小粒の蜜柑を鈴生りに付ける  
八十路過ぎ足腰弱れば親しげに老いはすり足で近寄りてくる

声

永野 えみ子（星雲）

明け方の雨の残した贈り物葉先に光るルビー・サファイヤ  
亡き夫のたのむよの声聞きたしと月日たちでも胸キュンとなる  
雨あがりに檸檬の花を見失う日々眺めいしわずか五輪を  
新聞ににつこり笑う聡太さん一瞬を撮るカメラマンの目  
「みつけたよ」桜の花の一輪をこぼれる笑みに風もよりそう

風の兆し

長谷川 典子（星雲）

ようやくに風の動きに兆しあり百舌の高鳴き頭上に響き  
真夜に聞く鳥のさえずり狂おしく灯の中の雨はやわらか  
黄揚羽の片羽根ひとつ草の上美しすぎる記憶を秘めて  
たくさんの星を隠した宇宙には賢治の星も見えずともある  
吹く風は千に万にと変化して生き物総て大地を包む

## 盆の午後

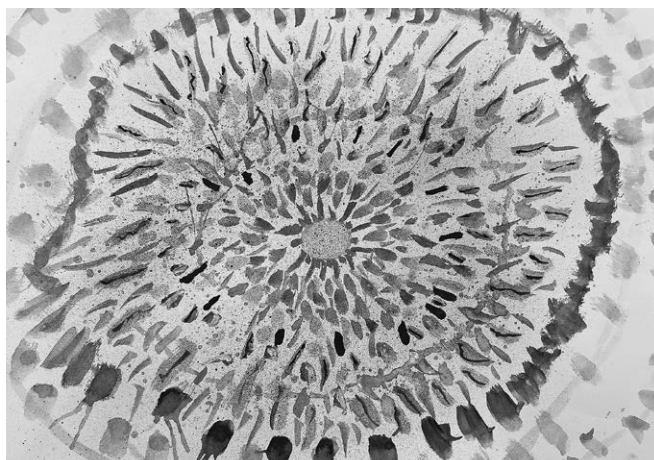
平川 佳美（星雲）

盆の午後に川あそびする子らの声賑わい戻ればてんでこまいよ  
天城路に前の車の舞い上げる落ち葉の中をつきぬけていく  
家中にひびく孫たちのかくれんぼ「もういいかい」にねずみも逃げる  
この年も鯉のぼり揚げ六歳に見せんとしたり幾年続くか  
突然のバースデー・ケーキ子ら持ち来狭間に生きて歳重ねゆく

## 代り映えなき日々

細川 晋代（星雲）

どくだみの花いきいきと梅雨近し夏の支度に気の急ぐばかり  
夏兆せど今日は真冬に逆戻り「どこでもドア」で旅することく  
この夏を何とか越したき老い二人秋の気配に耳をそばだて  
湯上がりの汗のあつまり止まる夜待ちわびていた爽籟聞こゆ  
おおよそは代り映えなき日々なれど思えばそれは有り難きこと



「モンスターアイ」

飯田 悠斗

【一般部門】

俳句

白萩

加藤 アキ子

涅槃会

岩城 紀子

海ちかき夜空一面翳雲

スーパ一の移動販売鳩の声

すがりたる網に逆さのいぼむしり

秋茄子の夕日を捕らへ黒光り

雨後の階きざし白萩の散り敷いて

軽トラックに積まれて跳ねて今年藁

鴨の大きく鳴きて晴れ渡る

唱和朗朗涅槃堂へと人の列

涅槃会や旅する人と輪になりて

退院の知らせ春菜を茹でをれば

輪島より出店来てゐる花の下

母の日の足に馴染みし靴履ゐて

浅漬の塩の加減も土用かな

背伸びして釘うつ冬の用意かな

桐の花

折田 倫子

針供養

池田 静子

雲低く流るる日なり鳥渡る

地図を手に里山歩く霜柱

山鳩のまろき啼き声春惜しむ

北へ合はす方位磁石や若葉風

桔梗ききょうや弔辞しよじに知らぬ夫を知る

どこからも目の合ふ遺影いせう桐の花

起き上がる力コスモス空を恋ふ

盆の月夫への伝言夢で言ふ

彼岸花地蔵の頭巾染める赤

針供養母の教えを今思ふ

秋の蚊や力尽きてか円く飛ぶ

行き帰り頭を下げる萩の道

あなたの句残したままの十三夜

障子張る一角残し猫通す

【中学生部門】

作文

## 栗をめぐる小さな争い

河津中学校 一年 高木 そら

毎年秋になると、我が家では栗の収穫をします。チクチクとしたイガの中には、ツヤツヤてかてかとした茶色の実ができています。私は栗が実つてくると、秋が来たなと実感します。

お母さんは収穫できた栗を、栗ご飯や栗クリームにしてくれます。栗ご飯は栗がごろごろとたくさん入っていて、ホカホカでおいしいです。寒いときに食べると心も体も温まります。栗クリームはそのまま食べても美味しいし、パンに塗っても美味しいです。私は特に栗クリームが好きです。だから、毎年楽しみにしています。だから、どの年も栗がたくさん取れると思っていました。

しかし、小学校低学年の秋、事件は起きました。前の年にはたくさん取れていたはずの栗が、その年は全然取れませんでした。私の大好きな栗ク

リームは、栗がたくさんないと作れません。小さな私は気になって、

「どうして今年は栗が全然取れないの？」

とお母さんに聞いてみました。すると、

「栗はたくさんできているけれど、今年とはるタイミングが遅くてイノシシに食べられてしまったのだよ。」

と言いました。私はこの言葉を聞いて、とても悲しかったです。イノシシのせいで大好きな栗クリームが食べられなくなってしまったからです。

そして小学校高学年の秋、今年こそイノシシに食べられないように早めに取ろうとしていました。でも、やっぱりイノシシに食べられてしまいました。

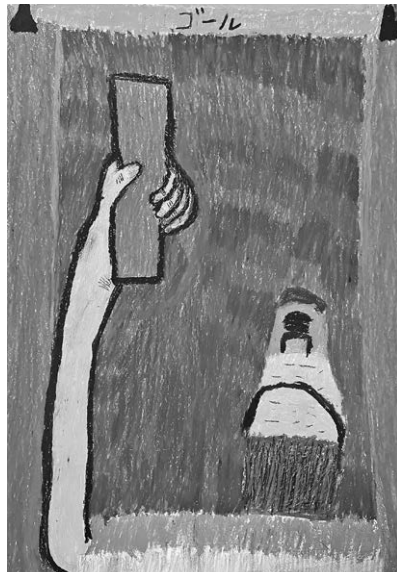
「イノシシのせいで栗クリームがまた食べられないよ。イノシシなんて大嫌い！」

私がそう言うのと、近くにいたお母さんが言いました。「栗がなかなか取れないのは悲しいけれど、イノシシも一生懸命生きているのだから栗が食べられしてしまうのは仕方ないよ。」

この言葉を聞いてこの時の私はピンときませんでした。なぜ、お母さんはこんなことを言ったのだろうとずっと考えていました。

でも、中学生になった今考えてみると、お母さんの言っていたことの意味がわかりました。イノシシにも命があるし、寒い冬を乗り越えるために一生懸命食料を探しています。こんなにも一生懸命なイノシシに対して、私はとても失礼なことを言っていました。お母さんの言っていた通りでした。そしてこのことがきっかけでイノシシだけでなく他の動物に対しての見る目も変わりました。それまでは畑のものを食べられたときは悲しかったです。でも今では、冬への準備を一生懸命頑張っているなと思うようになりました。イノシシのおかげで私は考えを変えることができよかったです、いい経験ができました。

そして今年ももうすぐ秋がやってきます。栗を早めに取りたいなという気持ちももちろんあるけれど、少しはイノシシのことを考えて残してあげてもいいのかなとも思っています。



「じょうねつの中で走るわたし」

鈴木 心礼杏

## てん

### 河津中学校 二年 高野詩七

今、私は一匹の犬を飼っている。その犬と出会ったのは二〇二四年十一月末のある日だった。

いつものように学校から帰って宿題などを終わらせ、晩ごはんを食べていた時、父から電話がかかってきた。

(電話が来たということは、もうすぐ帰ってくるのかな。)

などと思いつながら、ご飯を食べていると、電話を切った母は

「パパが犬を拾ったって」

と言った。全く理解が追いつかなかったが、急いで晩ごはんを食べ終え、父の会社へ向かった。

父の会社に着くと中に一匹の犬がいた。余裕で飛び越えられるくらいの高さのかごの中に、飛び越える素振りもなくちょこんと座っていた。そし

て、とても汚れていた。

私達はその犬を家に連れて帰り、お風呂場で洗ってあげた。とても痩せていたので心配になり、洗っている途中でご飯をあげると、とてもたくさん食べてくれた。

お風呂に入れた始めた時は感情がない感じだったけれど、洗い終えて乾かしてから部屋に連れていくと、とても人懐っこいことに気付いた。

(こんなに人懐っこいのにこんなに痩せているってどういうことなのだろう。飼い主さんも探しているのかな。)

などと考えを巡らせていた。

この時はまだ我が家で飼えるとは思わなかったので、いつか飼い主さんの元へ帰ってしまうのだろうなと思っていた。だから、あまり愛着が沸かないようにしていたけれど、犬が大好きな私にとっては無理だった。できることならこのままずっと飼いたいな思っていた。

この日から二日後、ようやく飼い主さんが見つかり、犬をその人のもとへ帰すことになった。私

は学校に行っていたので、父からその話を聞いた。私は無事に飼い主さんが見つかった良かったと思ったと同時に、なんだか少し寂しかった。

すると、その日の夜、飼い主さんから電話が入った。その電話の内容は、事情があつて飼えないから、私の家で飼ってほしいという依頼だった。

迎えに行くかどうかどうしようか、家族で話し合い、迎えに行くことになった。迎えに行くと、前の飼い主さんがいた。私達はその人から名前や年齢、犬種、誕生日などを聞いた。この犬のことをたくさん知ることができてうれしかった。

その日から、正式に私達の家族になった。そして新たに「てん」という名前をつけた。最初は何が好きなのか、どんな遊びが好きなのか、嫌いなことやものは何なのかなど、探り探りだった。大変なこともあったけれど、その時間も楽しかった。

そして、我が家で前に飼っていた犬たちとは全然違うということに気づいた。犬種も年齢も今まで育ってきた環境も全然違うためか、行動も全然違った。てんには犬らしくない面もとてもたくさ

んある。丸まらず、人間のようには仰向けで寝たり、抱っこされるときにお腹を出しても全然抵抗しなかったり、可愛いけれど個性的で変だなと思つている。

てんは今九歳で、人間の年齢にすると約五十二歳だ。けれどそんな年齢に見えないくらい元気だ。約八年間、とてつもない環境で生きてきたてん。そんな犬と出会うことになるとは思つてもいなかった。てんと出会えたことはとても貴重な経験だ。

世の中にはてんのような犬たちがたくさんいると思う。犬だけではなく、猫やハムスターなど、辛い環境に置かれていたくさんの生き物たちがいる。

私は私にできること、てんを大切にすることを頑張りたい。そして少しでもこのような境遇の動物たちが少なくなればいいなと思う。

## ケガはいいこと

河津中学校 二年 高木 勇太郎

夏休みの部活での練習中、いつも通りに練習をしていると急に左膝が痛くなり始めた。膝が痛くなることは以前からよくあったので特に気にはしていなかった。でも要因がわかっていなかったで、その日は途中から練習を休むことにした。

痛くなり始めて数日後、なかなか痛みが引かなかったので病院を受診した。椅子に座って診察の順番が来るのを待っていた。これまで何回も足が痛くなっていたので、正直、僕は、

(そこまでひどいケガではないだろう。)  
と予想していた。レントゲンを撮り終わり、待っている病院の先生がレントゲン写真を見せながら顔をしかめて言った。

「膝蓋骨いわゆる膝のお皿が割れています。疲労骨折だと思います。そして、おそらくその影響

で膝に水が溜まっています。」  
予想もしていなかった先生の言葉に僕は啞然とした。

その後、何回か診察を受けた結果、「分裂膝蓋骨」という診断結果がくだされた。分裂膝蓋骨とは、膝蓋骨が複数に分裂したままの状態のことをいう。病院の先生からは、一か月は運動を禁止するようにと言われてしまった。僕はその言葉を聞いた時、ケガしてしまったことをとても後悔していた。

運動を禁止し始めてから数日後、運動会練習が始まった。僕はクラスの色リーダーだった。練習に参加できないので、僕ができることは、みんなに声掛けや練習をすすめることだけだった。色リーダーなのに自分だけが練習に参加することができない現実がとても悔しかった。

悔しい思いをするのは、運動会練習の時だけではなかった。部活では、みんなが汗を流して練習をしているのに、僕は声を出すことや、ハンドリングをすることしかできなかった。早く練習に参

加したいという気持ちと悔しい気持ちで、いつも胸はいっぱいだった。

運動会本番は地道な毎日のストレッチやリハビリのおかげで、なんとか参加することができた。部活の試合でも交代をしながらチームのために貢献できたと思う。

運動ができるようになったことはもちろんうれしいことだが、運動ができるようになったことよりも、僕はもつと価値のあるものを得られたように感じている。それは、ケガをした経験だ。最初はケガをしていいことはないと思っていたが、今回のケガを通して得られたものがたくさんある。例えば、周りを見る力や、行動力だ。バスケットでは、ハンドリング力や体の柔軟など得られたものがたくさんある。また、これまで気にしていなかったケガをしている人や体の不自由な人の気持ちを理解することができた。自分より辛い思いをしている人は世の中にたくさんいるから、そのすべてを理解できたわけではないが少しは気持ちが理解できたように思う。今回のケガから、様々なことに

気付けたのは、これまで自分が健康的に過ごしてきたからだと思う。そして、僕の健康は周りの人の支えがあったからこそのものだったと気付いたのだ。

これからの人生、辛いことや、悔しいことはたくさんある。様々な困難にぶち当たった時に今回のケガを通して学んだことを思い出して、困難な出来事を乗り越え、そしていつも前向きでいられる人になりたいと思う。

## 最後の試合

河津中学校 三年 小澤 和人

三年最後の集大成となる中体連がありました。自分は部長として最後まであきらめずにみんなを引っ張ろうと思いました。決勝戦はここ三年間ずっと負けていた相手でした。自分たちは、今度こそこれまでの悔いを晴らそうと決め、全力で戦いました。前半自分たちのペースでゲームを運べず、相手のペースに何とかわついていくという展開になりました。苦しい時間が続き、

(少しでも気が緩めば、相手の思うつぼになる)とみんな思い、どうにか耐えて自分たちのペースにゲームをもっていこうとプレーしました。しかし自分たちはシュートを決めきれず、自分たちの点数が伸びないのに対し、相手の点数はどんどん増えました。徐々にみんなの顔から焦りが見えはじめました。自分はこんなときこそ部長として最

後まで声を出し、みんなを引っ張ろうと思いましたが。後半が始まり最初の三分間は自分たちのペースでゲームを運べました。

しかし、いつも決めているはずのシュートが入らず、だんだんと相手ペースの展開になりました。相手に点を離される一方でしたが、最後の最後までみんなで戦いました。

自分たち三年生はずっと中体連で優勝しようという目標を立てプレーしてきました。結果としては負けてしまい、努力が足りず悔しい思いをすることになりました。

これまで自分は部長として日々の練習から声を出し、チームメイトのお手本となる部長になれるよう頑張りました。部活が終わった後も家で自主練習に取り組み、個人スキルと体力の向上を目標に家族の力も借りて練習しました。

また、チーム内でうまくいかないこともたくさんありました。ですが顧問の先生の指導や、副部長が協力してくれました。チームメイトも支えてくれ、このチームだからこそ乗り越えられたと思

うことが多くありました。そして良いチームになることができました。

たくさんの努力をして、多くの困難も乗り越え、みんなで本気で練習に取り組みました。負けてしまったことで、いくら努力しても、気持ちの面や発揮できる力で勝敗は変わってしまうことも実感しました。ですが、みんなでチームとして協力して最後まであきらめず戦い抜くことができてとてもうれしかったです。三年間で目標とする中体連優勝や東部ベスト四を達成することができませんでしたが、このチームでプレーできたので後悔はないです。

部長としてのこの経験は、選手としての始まりに過ぎないと思います。このチームで経験した悔しさや楽しさなどを心に大切にしまい、高校でもバスケットを続けるので、この経験を生かして素晴らしい選手になれるように頑張ります。



「きけんな熱帯の川」

滝口 創太

## 僕のバレーボール人生

河津中学校 三年 山本陽向

僕の中学校生活でのバレーボール人生がこんなところで終わってしまった……。

僕は友達に誘われて、小学四年生の頃から東伊豆バレーボールクラブに参加した。気付いたらバレーボールに熱中していて、当たり前のように中学では、バレーボール部に入部した。

一年生のときは、三年生にとって最後の大会の中体連が近かったため、基礎練習ばかりだったが、僕は基礎練習もなぜか楽しく感じた。三年生が引退して代が変わるとスタメンになることができた。しかし、あるとき練習試合を休んだことがあった。次の日の練習に行くのと、

「今日からベンチだ」

と言われた。頭が真っ白になってしまった。ここで普通ならレギュラーを奪い取れるように頑張る

うと思うのだろう。しかし、僕は違った。やる気がなくなってしまったのだ。あれだけ好きだったバレーボールが嫌いになってしまった。いつもの練習が楽しくなくなり、集中することができなかつた。夜の練習や練習試合もさぼるようになってしまい、大会などがあっても、一生懸命応援することができなくなってしまうていた。

二年生になったある日の試合で、怪我をした選手の代わりに試合に出ることになった。久しぶりの試合でのプレーは、満足いくものではなかったが、バレーが楽しく思えた。楽しく思えたことで、少しずつやる気も出てきて練習に一生懸命取り組むことができた。

春の東部大会では少し活躍できて先生にも褒められた。勝ち残ることもできて本当にうれしかった。しかし、大会二日目が直前に迫った大事なときに、右足を骨折してしまった。僕は、

(前からしつかりやっていたら今こんなことになってなかったのかもな)

と思った。結局その後の試合には出られず、練習

もできない毎日が続いた。その一方で、練習しているチームのメンバ―が上手くなっていくのがわかった。自分はジャンプ力も下がり、スパイクもサーブも弱くなってしまい、ベンチで応援することになっていった。

(もう二度とスタメンで出ることはないだろうな)などと考えていると、いつの間にか涙が出ていた。悔しかった。こんな自分に腹が立った。三年生になつたら、絶対に活躍して勝つと心に誓った。

三年生になつての春の東部大会では準々決勝でライバルのチームと当たった。活躍を誓った僕もその試合にスタメンで出ることができていた。大接戦で一セット取ることができたが2セット目は取られた。ラスト一セットは、みんなの息のそろったプレーでなんとか勝つことができた。そして県大会に出ることができて大きな達成感を味わうことができた。

この勢いのまま最後の大会に挑んだが、結果地区大会で負けてしまった。僕の中学バレーボール人生はあっけなく終わってしまったのだ……。

今振り返ってみると、後悔することが多くあった。

(あのときもつと頑張れたら。しっかりと練習に取り組んでいたら。)

と思うことが数多くあった。僕はそのときにあつたできごとに左右されてしまうことに気付いた。試合に出ることができたらやる気も出るし、出られなかったバレーが嫌いになる。自分に強い気持ちがあれば良いのに、その強さが足りない。試合に出られるのはうれしく、楽しいけれど、結局それまでに自分が自分の意思でどれだけ努力をできたのかが大切だと思う。

中学バレーボール人生は終わってしまったけれど、バレーボール人生は、これからも続けたいと思っている。だからこそ、どんなときでも強い気持ちをもってバレーボールに取り組み、これまでとは違った人生を歩めるようにしたいと思う。



「524号列車」  
和泉 温真

【中學生部門】

詩

## 発表会

河津中学校 一年 山田 鈴華

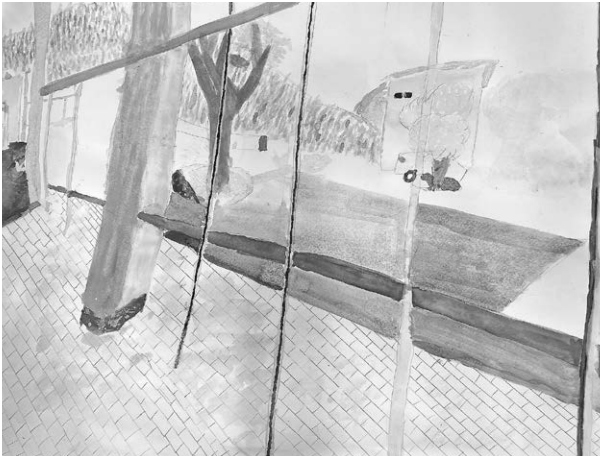
目の前に  
たくさんの人

もう逃げられない  
体ごと  
脈をうっている

こんなに  
緊張するのは  
初めてだ

気付いたころには  
発表も終わって  
たくさんの拍手をもらっている

いつもいつも  
思うけれど  
緊張するのは  
一瞬だ



「学校のげんかん」

関 美和里

## 中体連

河津中学校 二年 鈴木 ひより

三年生最後の大会

ペアを組むのも最後の日

絶対勝つと決め

コートに入る

ペアと二人で笑いあい

ペアと二人で声を出す

点を取ったらよっしゃ!

ミスをしたらどんまい

緊張して上手に打てない

打ち返すボールは

希望と不安が混じっている

一球一球慎重に返す

ボールを打ったび

乾いた音が響き

風に乗って遠くまで飛んでいく

太陽がまぶしくて

汗が光る

ファイナルデュース

頭の中で心臓の音が響く

次は私のサーブだ



「友達と帰った玄関」

倉田 こはる



「大好き愛犬」  
鈴木 康祐

【中学生部門】

短  
歌

## 河津中学校 一年

田舎道スマホ片手に歩行中崖から落ちて生命の危機

勉強中はっと目覚ます母の声おやつの合図目覚まし時計

三回も一週間に病院へ兄から熱が弟妹移る

手を振って気持ちを入れてトス上げる鋭く曲がるサービスエース

部活後に自転車飛ばし暗い森木の枝動き驚き転ぶ

空からのグラデーションの贈り物海をも染める日の出の魔法

帰り道友とダッシュバス停へ置いて行かれてぼつんと二人

演奏で坂本九の名曲の高音パートできてうれしい

夏の昼クレンゲーム友達とスイッチ狙う目指せ一等

なぜだろう私のお菓子減っていた兄を観察恨みを晴らす

風邪気味の息ができない喉不調咳をするたび痛む腹筋

サッカーで懐かしの友対決だ変わってないなプレースタイル

交代し本気のバスケット二分間負けて悔しい東部大会

稲葉 佑

宮崎 芽生

福司 暎介

平川 和空

土屋 駿人

坂内 こと子

高木 そら

島崎 環

鈴木 彩映

鈴木 もも

土屋 歌巴

飯田 睦叶

正木 統真

河津中学校 二年

感動が忘れられないあの時間自分に合ったギターのピック  
見直して満点狙い自信あり二回も書いた同一単語

緊迫感ゴール見据えて走り出す一〇〇mはつかの間に過ぎ

決勝がかかった試合ミス続き決まって終わる敵のスパイク  
がんばったいつも練習英単語合格できてマジでうれしい

音を立て色とりどりの火花散る今年の夏も線香花火

個人戦気持ち押されて敗戦に頬を流れる汗と涙が

スタートで寄せる不安は波のよう背中を押すは友の声援

大塩家弟二人父ピンチ熱出していた三人組が

棒アイスとけてなくなるいつの間は一瞬限りの楽園タイム

一瞬で目を奪われる獅子の面我也吃驚鋭い眼光

友達と浮き輪で浮かぶかぶかぶかと流れるプール流れる時間

放課後に先輩をみて打つサブチャレンジしてもラインクロスに

気持ちいいスパイク決まりハイタッチ仲間の顔にはじける笑顔

日曜日緊張走る決勝だ二十一個のアウトを重ね

杉山 佳菜子

鈴木 誉士人

酒井 聖夜

鳥澤 建樹

簾田 桜成

外岡 莉子

島崎 希々花

笹川 明李

大塩 太一

高木 勇太郎

坂下 蒼仁

山本 花

鈴木 貫太

土屋 芽唯

唐島田 泰

河津中学校 三年

お姉ちゃんイルミネーション出かけてく私はひとりテレビの光

カラカラとラムネの音が響くとき遠くで笛の音が聞こえる

紅葉葉と秋風の吹く山並みは日の光にて黄金に揺れる

たんぽぽのひみつの話聞いてたらとなり友が微笑んでいる

鮮やかに集うつぼみに明日もまた春の訪れ日々訪ねけり

まだあると勉強せずに寝てる日々テスト当日止まるシャーペン

大晦日みんながジャンプしてるときはねる間もない勉強の日々

草むらにふんわりと咲く淡い花春が残した贈り物かな

肉厚の旬のしいたけ噛みしめてふわりただよう醤油の香り

空見れば明るく淡い冬茜帯びる紫十五の心

焼き芋を二つに分けてのぞいたらここに広がる黄色い世界

山本結良

川尻怜奈

平川紗也

高溝満叶子

土屋真緒

鳥澤唯生

福司健介

大塩結愛

山本紗良

高溝満叶子

堀江陽太

【中学生部門】

# 俳句

河津中学校 一年

梅雨入りや広がる髪がまとまらず

空見上げ花火が背負う夢希望

ぶるぶると一人耐え抜く姫林檎

期待込め空高く舞うしゃぼん玉

皮むけば香り漂うバナナかな

餌やりに金魚の群れが口開き

流れ星願いも光る夜の空

つかむんだあの逃水に手を伸ばす

煌めくは宇宙のかから流れ星

風吹いて自由な空へ風鈴と

さわやかな歌が聞こえる梅雨の朝

手を伸ばし入道雲を見てる君

空へ飛べ緑映してシャボン玉

きらきらと光る宝水晶柱かな

匂い増しおいしさ求め育つ桃

大塩七愛

宮崎芽生

稲葉陽大

土屋七菜

正木翔太

土屋駿人

坂内こと子

土屋歌巴

田畑脩蔵

正木統真

原大獅

鈴木彩映

鈴木來海

後藤菜那

望月清登

河津中学校 二年

蒲公英や踏まれてもなお風に揺れ  
曇ふるバレエする我かじかむ手  
東風入りプリント飛んで焦る友  
曼殊沙華誇らしく咲き荘厳に  
速すぎる願い叶えて流れ星  
漆黒に煌めく瑠璃の夜光虫  
吹き走るはじける笑顔しゃぼん玉  
部活前ひまわりを見て奮起する  
止まぬ雨踊る心の蝸牛  
若鮎やきらりと光り川を舞う  
染まる空雲の隙間に夕焼けが  
踊り出す風鈴たちや澄んだ空  
山の上見上げた先に星月夜  
紅葉や森に絨毯舞い落ちる  
笑みこぼれ七色の虹雨上がり

増田心春  
鳥澤建樹  
杉山佳菜子  
相馬健心  
簾田桜成  
酒井聖夜  
笹川明李  
土屋聡躍  
高木勇太郎  
小林 耀  
土屋カナ  
土屋芽唯  
高野詩七  
北川太陽  
森 小陽

河津中学校 三年

また見えた桃色の花指さして

土屋 真緒

たんぽぽや次へ次へと繋いでけ

平川 紗也

花冷えに君の既読をまだ待つよ

金指 和希

かくれんぼ分身多く四つ葉かな

長谷川 湧士

寒き冬耐えた者こそ得る力

平川 柊叶

桜咲き風に揺られて人気者

江口 丈太郎

人混みの中でも見える桜色

山本 芯

風そよぐ青葉の森に花歌う

大塩 千晶

雨上がり水たまりには春の虹

五十嵐 沙羅

また栗か季節限定増えてきた

朝岡 奈央

海向かい踏み込むペダル風を切り

稲葉 裕壽郎

## 編集後記

『文芸かわづ』第二十五号が完成いたしました。これもひとえに、ご寄稿いただいた皆さま、そしてご協力いただいた関係機関の皆さまのおかげです。心より感謝申し上げます。今号より、河津町のホームページでも公開される運びとなり、より多くの方に作品をお届けできることを大変うれしく思います。

さて、今号のテーマは「昭和100年 河津町の思い出」でした。この百年は、戦争と戦後復興、高度成長、バブル経済崩壊に至る激動の時代でした。終戦からおよそ八〇年が経ちますが、世界では今なお紛争が絶えません。しかし、日本は戦後の反省の上に平和を希求し、それが保たれています。これは、世界的にも稀有なことと言えます。争わず、自らの地域を愛し、平和を願う心こそが文化の礎であり、私たちが大切にすべきものです。

今回、このテーマに共感し、新たに寄稿された方が増えたことも大きな喜びです。『文芸かわづ』は、町民の皆さまの文化の灯であり、故郷への思いを紡ぎ続ける大切な宝物です。これからもこの灯を絶やすことなく、守り続けていく所存です。河津町の文芸文化がいつまでも輝き続け、多くの人に愛されることを願い、結びの言葉とさせていただきます。

編集長 長崎 良夫



**編集委員** (五十音順 敬称略)

太田幸子・折田倫子  
久保田真琴・杉山みはる  
長崎良夫

文芸かわづ 第二十五号

発行日

令和八年三月

編集発行

河津町教育委員会

印刷所

(有) サ ン 印 刷

